

---

# 仮面ライダー大戦ガンバライド

ログ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダー大戦ガンバライド

### 【Nコード】

N9924T

### 【作者名】

ロゲ

### 【あらすじ】

とある研究所で、悪の軍団「大ショッカー」に襲撃された事件から10年後。

三度の飯よりガンバライド好きの小学6年生「桜坂ケンタ」は、怪人に襲撃されるが、偶然取り戻したベルトの力で「仮面ライダーデIFOース」に10年ぶりに変身する。

そこで知り合った青年「門矢士」の仲間となり、12の仮面ライダーの世界をまわる運命になる。

友情と成長と恋愛が絡む仮面ライダーバトル小説！！

追加エピソードを追加して再降臨！！

## Episode「DECADE」・変身

ここは、とある研究所。

そこでは、ある一人の幼い少年の改造実験が行なわれた。ある鎧を装着させるために。

ソウマ「タカシさん・・・すべて終了しました。」

ソウマと呼ばれる者は、タカシに報告した。

タカシ「でかしたぞ。これで・・・あの大シヨツカーにも・・・！」

タカシは闇の秘密結社「大シヨツカー」から、世界を守ろうとして、改造実験を行ったのだった。

しかし、それもここまでだった。

突然、部屋の窓ガラスが割れ、そこから黒いスーツに身を包んだ人間が群れで入ってきたのだ。

そして、その後にそのボスであろうピンク色の戦士が入ってきた。

タカシ「大シヨツカーの戦闘員か・・・。それと、ディケイドか・・・。」

ディケイド「その少年・・・渡してもらおうか・・・！」

タカシ「渡すか！変身！」

「カメンライド ディザーク」

タカシは仮面ライダーディザークとなり、ディケイドへと走り出した。

そして、研究所は眩い光に包まれて・・・。

タカシ「ケンタ

これを

！世

界を 救え！」

ケンタと呼ばれる少年は、銀色の機械を手にした。

すると、機械は赤色に光だした。

そして、そのまま気を失ってしまった。

「カメンライド デイフォース」

ケンタは仮面ライダーデイフォースとなった。

あの電子音声になったときから。

デイフォース「！」

デイフォースは赤い光線を放った。

その力で、研究所ごと、吹き飛ばしてしまった。

デイフォースライダーはその後、どこかへと姿を消し、ただ年月だけが過ぎていった。

そして、10年後。

ギューイイイイン！

スロットが回りだした。

ファイナルラウンドだ。

俺のチームはW・サイクロンジョーカーと新1号だ。

相手は龍騎とアギトだ。

そして、ゲキレツアイコンを2つそろえられなかった。

相手はそろえている。

相手の必殺技「昇竜突破」！

ケンタ「ぐわあああ！」

はじめまして、俺の名はケンタ！よろしく！

俺は今、見てのとおり負けました。

そのバトルが僕を世界の冒険に導かせてくれたのだと思う。

ケンタ「龍騎……龍騎……龍騎……龍騎……龍騎……」

「。イブキ」なにぶつぶついつてんだよ。てか、少しぐらい元気出せよ。」

「ケンタ「イブキはいいよな」。金持ちで。」

「イブキ「なんだよ、その言い方！で、放課後にゲーセンでな！」ケンタ「ああ。」

「で、ここはゲーセン。」

「俺はW・サイクロンジョーカーと、新1号のチームだ。」

「イブキはカブト・ライダーフォームとブレイドのチームで二人でバトルだ。」

「ギューイイイイイイイイン！」

「スロットが回りだした。」

「ビギューン！」

「俺のほうがあタックポイントが上だ。」

「ダブルアタックが発動した！」

「カイト「よお！ケンタ！」

「ケンタ「カイト！ちよつと待ってるよ！すぐに終わらせるから！」

「そして、ラウンド2がはじまるうとしたとき。」

「なんと、ガンバライドの機械から20歳ほどの青年が飛び出してきた。」

「そして、ガンバライドの機械がとまってしまった。」

「ケンタ「この人どつかで見たことあるような……。」

「その青年は赤いカメラをぶら下げていて、黒いマントのようなものがついている服を着ていた。」

「????「じろじろ見るなよ……。」

「その人は、赤いカメラで俺を写した。」

「ケンタ「これは……。」

「俺はその人の隣にあった白い物体を拾ってみると……。」

これは、デイケイドライダーだったのだ。

ケンタ「あなたはまさか……………土さん？」

????「なぜしつている……………」

ケンタ「有名だからだよ……………」

土「まあ、いい。っていうか、お前ら逃げろ！」

ケンタ「土！このカード使ってみるよ！」

俺はブレイドキングフォームのカードを土に手渡した。

土「やってみるか……………」

土がそういつた瞬間、ガンバライドの機械の中から、怪人が出てきた。

この怪人は、グロンギのうちの一体だ。

??????「グビバゼバ、ゼババビガバブ！」

土「グビグビうっせーなー！変身！」

「カメンライド デイケイド」

土はデイケイドに変身した。

デイケイド「うりゃあ！」

ズヴァア！ズヴァアアアア！

デイケイドはライドブツカ-をソードモードにして、怪人を切りまくった。

怪人「グババヒ！ジヨカカフ！ギギナバババグ！」

イブキとカイトは怖くなつて逃げ出した。

俺はバトルを観戦したので逃げなかつたんだ。

デイケイド「おりやりやりやり！」

デイケイドはとどめを刺そうとすると、怪人が口から、マスカレー

ド・ドーパントを10体ほど出した。

ケンタ「なぜグロンギからドーパントが！」

そして、ドーパントに囲まれたデイケイドはぼこぼこ攻撃され、ついに変身不能となった。

ビュウウウウ！

士のデイケイドライダーが飛んできた。

ちがう、士のデイケイドライダーは、銀色ではない。  
と、すると……。

俺はそれを受け止めた。

変身するしかない！

俺はそう決意した。

ケンタ「変身！」

「カメンライド デイフォース」

カードを装填すると、音が鳴り、イクサのように、スーツが俺の前に現れた。

そして、こっちに近づいてくる。

そして、俺に触れた瞬間、スーツが赤くなり、俺を包んだ。

ガンバライドの機械から見える俺の姿は、銀色でNEW電王とデイケイドとキバを足して3で割ったような姿だった。

デイフォース「お前ら全員ぶっ倒す！」

俺は腰に付いていた銀色のライドブッカ-をソードモードにして切りかかった。

ズバババヴァー！

まずは、マスカレード・ドーパントを倒していった。

すると、グロンギの怪人がビームを出してきた。

俺は、それをするりとよけ、ライドブッカ-をガンモードにして、

怪人を打ち飛ばした。

怪人「グワアア！バギギバス……ギガガダバジバ！」

怪人は燃えて、消えた。

すると、マスカレード・ドーパントも消えた。

デイフォース「なんだったんだ……。」

俺は変身解除をすると、士のほうにかけてった。

ケンタ「大丈夫ですか！」

士「お前・・・・・・・・ライダーだったのか・・・・・・・・。」  
ケンタ「一応・・・・・・・・。」  
士「なら、俺とともに世界を巡ってくれないか。」  
ケンタ「はい。喜んで。」

??「この世界にもライダーが生まれてしまった・・・・・・・・。これもデイケイド！お前のせいだ！」  
誰かがぶつぶつといていた。  
それを言ったのを俺も士もわからなかった。

数分ほど歩くと、「写真館」という看板のついた、店についた。  
俺と士は中に入ると、俺は、冗談のようにこう言った。  
ケンタ「あれ？ここって、喫茶店じゃなかった？」

士「写真館だ！」  
リビングらしき部屋に着くた。  
ガンバライドのカードの書かれた絵の下げられている。  
近寄ってみると、下にいろんな絵がある。

すると、2人の人が入ってきた。  
ユウスケと夏海だ。

ユウスケ「あれ？士。客が来てるの？」

夏海「久しぶりですね。子供は。」

士「こいつ、ライダーだ。」

ユウスケ「ふうん。」

夏海「君はなんていう名前なんですか。」

ケンタ「ケンタ・・・・・・・・桜坂ケンタだ。」

ユウスケ「よろしく、ケンタ君。」

ケンタ「ケンタでいいよ。」

士「こいつが旅の仲間入りしたいらしい。」

夏海「そうなんですか？」

ケンタ「……うん。」

ユウスケ「というよりも、ほんとにライダーなのか？」

ケンタ「あたりまえだ。変身。」

「カメンライド デイフォース」

俺は、変身して見せた。

ユウスケ「うわあっあ！ほんとにライダーなんだ！」

ケンタ「な？俺もライダーだよ。」

すると、絵の隣にある鎖が光った。

ケンタ「さあ、世界をめぐる冒険の始まりだ。」

俺は、鎖をいじって、絵を下ろした。

すると、絵が下に下りてきた。

この絵は、ガイアメモリがたくさん並べてある。

ケンタ「Wの世界だ。さあ、外に出てみようぜ。」

## Episode「DECADE」・変身(後書き)

再びこのサイトに戻ってきたログです。

やっぱり、小説ならTwitter並にみんなが見るこのサイトのほうがいいです。

つてな訳で、この小説を再び全話投稿しますので、よろしくお願ひします！

## Episode「W」・Nの復活／最初の世界

ガチャ。

俺はドアをあけた。

すると、目の前にドアがまたある。

そして、右手側に階段がある。

すると、一人の男性が目の中のドアに入ってきた。

翔太郎「うちに、用か？」

この人

！

風都一の超探偵の助手だ　！（翔太郎ファンの人、すみません。逆ですね。）

ケンタ「ええ？用なんてないって。」

翔太郎「そつか……。」

翔太郎は、階段を下りていった。

「きゃあああああああ！」

すると、どこからか悲鳴が聞こえてきた。

翔太郎「！」

翔太郎は階段を折り終わる途中、くるつと振り向いた。

そして、外に向かつて走り出した。

ケンタ「さっすが……W……。ソクソクするねえ。」

俺は、フィリップの口振りですつとつぶやいた。

翔太郎がここを出て行ったあと、俺はそつと出てきてみた。

すると、そこにはドーパントがいた。

ドライバーをしているから多分、幹部なのだろう。

これは……タプー！

なんでだ……死んだんじゃないのかよ！

俺は、そんな感じに驚いた。



アクセセル「てやあ！」

「エンジン」

アクセセル「くらえ！」

バババババババババババン！

「エレクトリック」

アクセセル「はあ！」

ズヴァアアン！

ドーパントを次々と倒していくのはアクセセル！

W（翔太郎）「行くぜ！フィリップ！竜！」

フィリップ  
W「OK。翔太郎。」

アクセセル「んじゃ、やるか。」

「ジョーカー マキシマムドライブ」

「アクセセル マキシマムドライブ」

W「ジョーカーエクストリーム」

アクセセル「アクセルフルキック」

Wは空中でふわふわと舞い上がり相手に狙いを定め、右半身と左半身に体が分かれ、そして、キックをくらわした。

アクセセルは足に力をチャージし、相手に向かって車のタイヤの跡のようなものを敵に付けた回し蹴りをかました。

デイフォース「くそお！」

「ファイナルアタックライド デイデイフォース」

デイフォース「俺の必殺技、パート1！」

俺はナスカに向かって普通にキックをくらわした。

タブー「覚えてる……。」

デイフォース「逃げしなに、覚えて居るは、負けたやつ！」

W（翔太郎）「きさま、何者だ。」

デイフォース「通りすがりの仮面ライダーだ。」

W（翔太郎）「お前に仮面ライダーを名乗ってほしくはないな。」

デイフォース「いいじゃないかよ。」

ここは、鳴海探偵事務所。

翔太郎「貴様あ！今、風都で話題になってる世界の破壊者の正体か！」

士「そうだけど？」

ユウスケ「きつぱり言っただけいいのか？」

士「いい。」

ユウスケも俺もシケた空気の中でじっとしていた。

フィリップ「検索が完了したよ。翔太郎。ディケイド 門矢士は仲間である光夏海の世界を救うために冒険していたが、大きな過ちを犯し、破壊者に目覚めてしまった……。そうだろうか？」  
士「ああ。」

そうだった！

ライダーを全員破壊しなければいけなかったんだ！

たしか・・・テレビシリーズの最終回で渡がいったんだっけ。

まあ、その後ライダーはすべて破壊され、キバラーにより復活したんだけれど。

ガチャ。

ドアが開いた。

たぶん依頼人だろう。

??「僕だよ。以来しに来た。」

士「海東。」

ユウスケ「なんで、お前がここに？」

海東大樹 士たちより前に、世界を旅していた大泥棒。

そんな彼は、仮面ライダーディエンドに変身する。

で、そんな彼は、ここに来るわけは大体分かった。

「星の本棚」か、「エクストリーム」のメモリだろう。

「星の本棚」とは、フィリップが持つ検索システムだ。普通、パソコンの検索エンジンは、ある条件を入れると、ページがヒットする。

そのページが本になっており、フィリップはその本を読み、知識を得て、事件を解決する。

そんな星の本棚は、この世界の情報をすべて入っているので、海東がほしがるのも無理はないと思う。

そして、「エクストリーム」のメモリは、Wが地球すべての力を手にした姿だ。

なかなか強い力を誇るので、こちらも、海東がほしがりそうだ。

大樹「僕の狙いは、星の本棚だよ。士。」

士「星の本棚だと？」

ケンタ「そんなことしたら、この世界を支える物がアクセルだけになるじゃんか。だめだよ。ねえ、翔太郎。」

翔太郎「星の本棚取ってことは、相棒を取ることなんだぞ。そんなことはさせねえ。ファンゲジョーカーに変身できなくなるからな。」

フィリップ「僕は、君の卓上辞典じゃないんだからね。」

ユウスケ「Wがなくなったらダメだよな。」

士「お前、ほんとこりねえな。大泥棒さんよ。」

翔太郎「大泥棒？今すぐ署に連行しよう。」

大樹「ヤバッ。変身」

「カメンライド デイエンド」

大樹はデイエンドに変身した。

「アタックライド インビジブル」

デイエンドは透明になり姿を消す「インビジブル」のカードを使い、どこかに消えてしまった。

????? 「う、うわあああああああああ!」

そんな時、どこかから叫び声が聞こえた。

翔太郎「行こう!」

俺と土・ユウスケ・翔太郎は、事務所の外に出てみた。

すると、そこにはドーパントがいた。

ケンタ「やるか、変身!」

土「変身!」

翔太郎「変身!」

ユウスケ「変身!」

「カメンライド デイフォース」

「カメンライド デイケイド」

「サイクロン ジョーカー」

俺はデイフォースに、土はデイケイドに、翔太郎はWに、ユウスケはクウガに変身した。

デイフォース「新しい力を試してやる。」

デイケイド「なんだ? そのカードは?」

デイフォース「まあ、いいじゃねえか。」

「ファイナルライド ネガタロスイマジン」

俺は、ガンバライドのスペシャルカード「ネガタロスイマジン」を装填してみた。

効果：相手の必殺技が出しにくくなる。(ガンバライド版の効果の一部、バトル用に変更しました。)

すると、ネガタロスが出てきて、ドーパントに何かをした。

ネガタロス「倒されるのは、テメエだぞ!」

ドーパント「ギャギャ!」

デIFOォース「次はこれだ！」  
「Fアィナルライド アビス」

効果：3分の1の確立で攻撃+800。失敗すると防御-400。

今度は、仮面ライダーアビスが出てきた。

ディケイド「あの副編！」

デIFOォース「頼むぜ！」

アビス「・・・。」

実際、ガンバライドでもこのカードを使って、攻撃がアップしたことはない。

でも、今はそんなことをいつている場合じゃない。

力がみなぎったのか、みなぎらなかつたのかは知らないけど、まあいい。

「アタックライド ブラスト」

今度は、ライドブッカー・ガンモードに連射機能を追加させる「ブラスト」のカードを使ってみた。

ドーパントはかなり痛がっている様子だ。

?????「やるな。翔太郎君。いや、仮面ライダー君。」

「ナスカ」

さっき襲われていた男は、ガイアメモリのスイッチを押し、ドライバーに差し込んだ。

このドライバーは、ミュージアムの幹部のドライバーでも、Wのドライバーでも、アクセルのドライバーでもない。

このドライバーはスカルドライバーに似ている。

「ナスカ」

再び、スイッチを押したときなつた音が鳴り、男はライダーに変身する。

????「ミュージアムに復讐を・・・。」

ライダーは、ドーパントに、剣で攻撃した。

デIFOォース「なんだ？あれは。」

W（翔太郎）<sup>フィリップ</sup> 以下ジョーカー「ドライバ―がついてやがる。」

W 以下サイクロン「水色のライダー。」

デイケイド「ケンタの召還したアビスじゃなさそうだな。」

ユウスケ「とてつもなく速い……。」

「？」「僕の名は、仮面ライダーナスカ。やあ、翔太郎君。僕だ、キリヒコだ。」

ジョーカー「キリヒコ？！死んだんじゃないのか?!」

サイクロン「どうやって再生したんだ？」

確かにキリヒコは、タブードーパントに暗殺された。

だから、生きていることはまずありえないのだが……。

デIFOォース「ナスカだっけ？さつさとやっちゃうぜ！」

俺がそう言った瞬間、突然、世界を繋ぐ壁から、2人の仮面ライダーが出てきた。

王蛇「ここか？祭りの場所は。」

カイザ「俺たちに帰る場所なんてないんだよ！」

王蛇とカイザ。

どちらも闇の心を持つライダーだ。

彼らは以前、ガンバライド第4弾のエクストラステージに登場した。

そして、その底力を発揮した。

王蛇「行くぜえ？」

カイザ「そうだな……。倒されるって解釈でいいのかな？」

デIFOォース「鳴滝の仕業か？」

鳴滝。

それはデイケイドの邪魔をする予言者だ。

その正体はなんと、スーパーショッカーに所属する、ゾル大佐だったのだ。

王蛇「鳴滝の言ってた『ライダー狩り』っていう祭りだー！カイザ、どっちが多く狩れたか勝負だ。」

カイザ「それは面白そうだな。で、お前らを狩るってことでいいのかなあ？」

デイケイド「来るなら来い！」

クウガ「俺が相手だ！」

王蛇「狩ってやる　　！」

カイザ「来い！」

「アタックライド　ブラスト」

デイケイドはライドブツカーをガンモードに変形させ、乱射する。

ドーパント「ウ・・・ウアアアアアアアアアアアアアアアア！」

突然、ドーパントが巨大化した。

デイフォース「こいつ、なんのつもりだ・・・。」

ドーパント「こんなちっぽけな世界など、あってもなくても一緒だ！こんな不要な世界、消してやる！」

デイフォース「本当に、消していいのか？」

ドーパント「そうだろ・・・。邪魔者がうようよしてるからな・・・。」

デイフォース「お前、馬鹿か？」

ドーパント「なんだと？」

デイフォース「ひとつの世界が破壊されたとき、世界全体のバランスが崩れる。世界全体のバランスが崩れたら、すべてが狂う。狂ってしまったら存在しないものが存在したりする。やがて、世界はすべて消滅し、すべてが無になる！」

ドーパント「お前、何様のつもりだ？」

デイフォース「通りすがりのガンライダー様のつもりだ。覚えとけ！」

ライドブツカーから、数枚のカードが出てきた。

そして、そのカードに色がついた。

おそらく、この世界でいべきことはいったのだろう。

デイフォース「行くぜ！士。」

「デイケイド「ああ。ケンタ。」

「ファイナルフォームライド ダダダダブル」

「ファイナルフォームライド ナナナナスカ」

「デイエンド「それだけでは無理だ。」

「デイケイド「海東、どういうことだ。」

突然、デイエンドがいた。

「カメンライド」

「フォームライド」 ジャンボ」

「ファイナルフォームライド デイデイデイケイド」

「デイエンドは、」を召還し、」をジャンボモードにし、デイケイドをファイナルフォームライドした。

すると、ナスカとWが自然にファイナルフォームライドされていた。ナスカは大きな剣に、Wはサイクロンと、ジョーカーに分かれていた。

サイクロン「さあ、お前の罪を」

ジョーカー「数える！」

「デイフォース」ナスカ、行くぜ！」

「デイエンド「これも、おまけだよ。」

「カメンライド ブレイド」

「ファイナルフォームライド ブブブブレイド」

「デイエンドは、召還したブレイドをファイナルフォームライドした。

「ジョーカー「キリヒコ、お前は俺が持つ。」

「デイフォース「使うんだろ？」

「ジョーカー「ああ。」

「サイクロン「この青い剣、使ってみよう。」

「デイフォース「みんな、行くぜ！」

「ファイナルアタックライド デイデイデイケイド」

「ファイナルアタックライド デイデイデイエンド」

「ファイナルアタックライド デイデイデイフォース」

「ファイナルアタックライド ナナナスカ」

「ファイナルアタックライド ダダダブル」

「ファイナルアタックライド ブブブレイド」

竜「俺を忘れるなー！変・・・身！！」

「アクセル」

竜は、俺たちの必殺技を追うようにアクセルに変身し、マキシマムドライブを発動させた。

「アクセル マキシマムドライブ」

俺とデイケイド（巨大コンプリート）、クウガ（マイティ）、アクセルは、いつせいにキックをした。

ジョーカー（ナスカブレード装備）、サイクロン（ブレイドブレード装備）は、ドーパントに斬りかかった。

デイエンドは、遠距離から、王蛇とカイザを狙う。

ド  
ン！

ドーパントに強烈なキックとスラッシュが炸裂する。  
王蛇とカイザは倒された。

ここは光写真館。

翔太郎「ケンタ・・・だっけ？ありがとう。この世界を救ってくれて。」

ケンタ「そんなことないですよ。みんなの力です。」

翔太郎「そうか。」

フィリップ「ところで聞きたいんだけどケンタ君、ファイナルフォームライドの原理を教えてくださいませんか？」

ケンタ「わ・・・分かりません！」

フィリップ「本当は知っているのだろう？教えてまえ。」

ケンタ「知らないって・・・。」

ドカン！

ケンタ「いったたった。って、壁紙変わってない？」



Episode「DEN・O」二つのSTORY流れる果てに

ケンタ「電王の世界らしい・・・って、なんじゃこれ　　！」

俺は、自分の服装にびっくりした。

士「俺の服装は、どういう服装なんだ？」

士も服装が変わっていたようだ。

ケンタ「それは・・・モモタロスの使っているきぐるみ・・・で、俺の着ているのが・・・鳴海壮吉　　！電王に関係ないやんか！というより、俺はこれを着れる歳じゃない・・・。サイズが合ってたねえ・・・。」

翔太郎「おやつさんがどうしたって？」

ケンタ「半熟には帽子は似合いませんっていうことです・・・。」

翔太郎「そうか・・・ってえ　　！」

ケンタ「おやつさんみたいな人がいる！」

壮吉「なあ、翔太郎・・・。帽子はまだ早いつて・・・言っただよな？」

俺は、翔太郎の方を見た。

翔太郎は、帽子を被っていた。

「スカル」

鳴海さんは、ロストドライバーにスカルメモリを挿した。

壮吉「変身」

「スカル」

壮吉さんはスカルに変身した。

翔太郎「もう、訳わかんねえぜ！フィリップ、行くぜ！」

フィリップ「行くよ、翔太郎。」

「サイクロン・ジョーカー」

翔太郎達は変身と言わずにWに変身した。

ケンタ「変身！」

士「変身！」

ユウスケ「変身！」

「カメンライド デイフォース」

「カメンライド デイケイド」

スカル「フェアじゃねえな……。お前ら、相手になってやれ。」

ナイト「俺と戦え！」

イクサ「その命……。神に返しなさい！」

スカル「行け！」

??「待て！」

スカル「なんだと？」

??「変身！」

「アルタイルフォーム」

アルタイルフォーム それは、ゼロノスの基本フォームである。

ゼロノス「最初にいつておく。俺はかーなり、強い！」

デイフォース「本当に強いのか？」

デイケイド「不安。」

クウガ「ああ。」

ゼロノス「本当に、かーなり、強いんだからな！」

スカル「何ならやってみろ。」

ゼロノス「ああ。やってやるぜ。」

スカル「こいつは俺がやる！」

俺たちはナイトとイクサの相手をする事になったのだが。

デイケイド「こいつにはこれが向いている！」

「フォームライド キバ ドツガ」

以前、デイケイドは龍騎の世界でキバ・ドツガフォームでナイトをメタメタにしたことがあるのだ！

ナイト「やってみろ。」

「サバイブ」

「ラ・イ・ジ・ン・グ」

ナイトとイクサは同時に最強フォームに変身した。

デイケイド「はあああああああ！」

デイケイドはドツガハンマーをナイトに向かって振り下ろすと、ナイトはそれをするりとよけ、ダークバイザーツバイでデイケイドを斬りつけた。

デイケイドはノーマル形態に戻った。

デイケイド「ライジングにはライジング、サバイブにはサバイブだ！」

「クウガ・アギト・龍騎・ファイズ・ブレイド・響鬼・カブト・電王・キバ ファイナルカメンライド デイケイド」

デイケイドは最終形態コンプリートフォームとなった。

「クウガ・龍騎 カメンライド ライジングアルティメット サバイブ」

デイケイドはクウガと龍騎をカメンライドさせ、龍騎を召還し、クウガを究極変身させた。

デイケイド「行くぞ！」

「ファイナルアタックライド ククククウガ リュリュリユ龍騎  
デイデイデイケイド」

クウガはイクサに、龍騎はナイトにデイケイドはスカルにキックを炸裂させた。

ナイト「ぐああ！」

イクサ「ああ！」

スカル「ぎやあ！」

デイケイド「決着はついた。この世界でやるべきことはもう終わりか？」

デイケイドは変身解除した。

「?????」ちよつと待ちなさいよ、桜井さん。」

ゼロノス「追ってきたのかよ。なぞのライダーさん。」

なぞのライダーがゼロノスの隣にいたが、まさか女ライダーとは思

わなかった。

俺も、ほっとして変身解除した。

????? 「あれ?あれ?まさか、桜坂君?」

ケンタ「だ・誰?」

俺の存在を知るこの世界の住人なんて知らないや。

なぞのライダーも変身解除した。

そのライダーの正体が……。

ケンタ「あ……亜由美!」

亜由美 時村亜由美それはクラスメイトのことである。

亜由美「何で、桜坂君がライダーなの?」

ケンタ「それはこっちのセリフだ!」

俺はそう言った。

亜由美「まあ、それはいいとして、桜井さん、イメージどっこ?」

ゼロノス「それはな、時村。2008年12月25日に飛んでいったんだ。」

士「ちよつと聞くけどいいか?そのイメージは何なんだ?」

ゼロノス「デスイマジン。死をつかさどるイメージだ。」

ケンタ「フィリップさんいる?」

フィリップ「どうした!」

ケンタ「検索いいか?」

フィリップ「分かった。」

ケンタ「キーワードは”デスイマジン”」2008年12月25日

”電王”だ。」

フィリップ「ビンゴだ!デスイマジンは、死をつかさどるイメージ、そして2030年11月15日に出没したそうだ。デスイマジンは、胸部を攻撃されるとひるんでしまう。」

ケンタ「情報がすごいな。フィリップさん。」

フィリップ「この世界では姉さんも出なかった……。」

フィリップさんは、星の本棚を持っており、Wの世界にいるときに

は星の本棚にフィリップさんの姉　つまり、園咲若菜が出てきて、  
検索の邪魔をされるのだ。

やはり、世界も変わったら出てこなくなったのだろうか・・・。

ケンタ「・・・変身！」

「カメンライド　デイケイド」

俺は、変身した。

理由はとにかくやろうと思ったからだ。

「ファイナルライド　デンライナーゴウカ」

俺は、デンライナーゴウカを召還した。

デIFOース「乗るぞ！」

俺たちはデンライナーゴウカに乗った。

デンライナーに乗ると、ウラタロス、キンタロス、リュウタロス、

ナオミ、オーナー、コハナがいた。

ウラタロス「客つて、珍しいね・・・って侑斗!!」

侑斗「でき、良太郎のやつどこにいる。」

コハナ「モモと一緒に2008年12月25日に行ってたわ。」

侑斗「大至急、行くぞ！」

2008年12月25日。

たしか、この日、俺の世界ではガンバライド第1弾稼動の日だった。

この日にいったい何が

デスイマジン「うがあああああああ！」

侑斗「デスイマジンか！変身！」

「アルティルフォーム」

????「4分で倒す。行くぜ、テディ。変身！」

「ストライクフォーム」

ケンタ「NEW電王か！」

NEW電王「いくぜ！」

ゼロノス「最初にいっておく。俺はかーなーり、強い！」

ケンタ「変身！」

「カメンライド デイフォース」

NEW電王「新種のライダー！まあ、4分でイマジンは倒す！」

デスイマジン「こいつら、相手せえい！」

ネガ電王「倒されるのは、テメエラだぞ……」

幽汽「お前らも、時間も、消してやる！」

ガオウ「ほおう、ライダーか。なぶり殺しにしてくれるわ！」

デイフォース「行くぜ！」

亜由美「あれ、もうデスイマジンいたんだ……。トキ！いくよ！」

トキとは、トキガミイマジン つまり、亜由美のパートナーイマ

ジンのことである。

亜由美「変身！」

「クロノスフォーム」

デイフォース「ぐああああああ！そういう時のための、これだ！」

「カメンライド W」

「アタックライド さあ、お前の罪を数えろ！」

デイフォース「さあ、お前の罪を数えろ！」

「フォームライド W ヒートジョーカー」

デイフォース「やるぜええええ……」

俺は、ヒートジョーカー独特の、炎の拳で、幽汽を殴った。

しかし、幽汽はびくともしない！

幽汽は、剣を使って俺を切る。

デイフォース「じゃあ、これだ！」

「フォームライド W ファンゲジョーカー」

デイフォース「うがああああああああああああああああ！」

「アタックライド ショルダーファンゲ」

俺は、ショルダーファンゲを投げ、今度は3人に攻撃した。

ネガ電王「生意気な！」

俺はよけ切れなかった。

デIFOォース「うわああああ．．．．」

クロノス「桜坂君！大丈夫？」

デIFOォース「まあ．．．な。」

ネガ電王「どけ．．．。邪魔なんだよ！」

「フルチャージ」

ネガ電王は必殺技を繰り出した。

俺は、亜由美の前に立ち、必殺技を食らった。

ケンタ「う．．．ううう．．．．」

俺は、変身解除した！

ガオウ「殺してやる！」

ケンタ「殺してみろ！」

クロノス「やめて　　！」

ガオウ「なぜそう言う？他人のことだろう？」

ケンタ「俺は死んでもかまわないさ。それで誰かを守れるのなら。」

クロノス「バカ．．．ケンタには私がついてないとだめなんだから

！」

その言葉に少しの柔らかさを感じた。

いつたいなんだろう？

この感じ．．．。

幽汽「じゃあ、貴様も死ねー！ー！」

「?????」「そう言うお前も死ねー！」

ケンタ「？」

俺は、一瞬わからなくなった。

何が起こったのか。

目の前にいる赤い鬼。

これってもしかや．．．。

「?????」「俺、参上！」

モモタロス。

赤鬼モモタロス。

そして、隣にいる男性は．．．。

野上良太郎。

電王の変身者。

彼らの登場が続いて、デンライナーからウラタロス、キンタロス、リュウタロス、土、ユウスケ、夏海さん、そして、翔太郎さん、フイリップさんが降りてきた。

幽汽にゼロノスが、ガオウにクロノスが、ネガ電王にNEW電王が変身解除させられた。

???「降臨、満を持して。」

さらにさらに、鳥イマジンジークまで登場した。

大樹「僕も参戦するよ、土。」

モモタロス「じゃあ、行くぜ！俺たちの変身！」

モモタロスたちはベルトをつけた。

俺たちも変身の準備をする！

ジーク「変身！」

侑斗「変身！」

リュウタロス「変身！」

ユウスケ「変身！」

夏海「変身！」

キンタロス「変身！」

ウラタロス「変身！」

翔太郎「変身！」

亜由美「変身！」

幸太郎「変身！」

大樹「変身！」

土「変身！」

ケンタ「変身！」

良太郎「変身！」

モモタロス「変身！」

「ウイングフォーム」

「アルティルフォーム」

「ガンフォーム」  
「アックスフォーム」  
「ロッドフォーム」  
「サイクロンジョーカー」  
「クロノスフォーム」  
「ストライクフォーム」  
「カメンライド デイエンド」  
「カメンライド デイケイド」  
「カメンライド デイフォース」  
「ライナーフォーム」  
「ソードフォーム」

全員変身した。

それと同時に、俺の使用カードが増えた。

その中の一枚のカードを、俺はライバーに装填した。

「ファイナルフォームライド ファイブイイイマジン」  
すると、モモタロスら5人のイマジンは何かの部品のようなものに  
ファイナルフォームライドされ、合体した。

それは、巨大なライナー（カードにはイマジンライナーと書いてあ  
った）だ。

イマジンライナーは、戦場を駆け抜け、ネガ電王たちを攻撃した。

ネガ電王「いでよ！わがデンライナー！」

ネガ電王がそう言うと、ネガデンライナーが現れた。

ネガデンライナーに乗っている巨大イマジンが俺たちに攻撃してき  
た。

それを止めるのは、イマジンライナーと、デンライナー・ゴウカ。

二つのライナーがネガデンライナーを倒した。

5人のイマジンは、電王に戻り、ネガ電王たちに攻撃した。

ウラタロスがネガ電王を、キンタロスがガオウを、リュウタロスが  
幽汽を倒した。

モモタロスとジークがデスイマジンに挑もうとしていた。

デスイマジン「くらえ！」

デスイマジンはモモタロスとジークを消した。

さらに、モモタロスに続いて攻撃しようとしていたゼロノス、NE  
W電王、クウガ、キバーラ、ディケイドも消した。

デスイマジン「もう終わりだ！降参しろ・・・。」

ディフォース「降参するわけないだろ！」

「ファイナルフォームライド　ククククロノス」

「ファイナルフォームライド　デデデ電王」

俺は、二人をファイナルフォームライドした。

ディフォース「行くぜ！」

クロノスは太刀に、電王はモモタロスになった。

電王「行くぜ行くぜ行くぜ！！！」

「ファイナルアタックライド　ククククロノス」

「ファイナルアタックライド　デデデ電王」

「サイクロン　マキシマムドライブ」

「ファイナルアタックライド　ディディディエンド」

Wの出した強風に乗り、俺は、クロノスで斬りつける。

それに続いて、電王もイマジンを斬りつける。

とどめにディエンドがディメンションシユートを放つ。

すると、デスイマジンが消え、消えていたライダーがよみがえった。

ディフォース「電王の世界、クリア　　！」

俺はそう言った。

しかし、甘かった。

どこからか、キンキンと音が聞こえた。

あれは、ミラーワールドの音だ。

俺は、鏡のほうを見た。

すると、そこには、仮面ライダーオーディンがいた。

オーディン「お前も来い・・・。」

「キヤッチイベント」

キヤッチイベントという名のアドベントカードにより、俺は鏡のほうに吸い寄せられ、ついには鏡の中に入ってしまった。

Episode「RYUKI」・覚醒する龍

景色が違う。

世界が変わったのか？

そう思った。

すると、頭上から、鳴滝の声が聞こえた。

鳴滝「お前とデイケイドと一緒にいては、すべての世界が破壊される！」

デイフォース「ひとつ聞いておく。ここは、何の世界だ？」

鳴滝「龍騎の世界だ……。せいぜい楽しむがよい……。あと、デイケイドを倒せるのなら倒してもよい。倒したら、君だけの世界がもらえ、願いがかなう……。」「

デイフォース「いらねえよ！」

何が楽しむがよいだ。

生と死をかけたバトルじゃないか。

楽しめる訳がない。

しかし、龍騎の世界。

新たな世界に着いたんだな。

ここでもがんばるとしよう。

?????「お前は、ライバーで戦ってはならない……。」「

どこからか聞こえる低い声は、俺の耳には入ってこなかった。

ガサガサ……。。

ここは響鬼の世界。

の、森。

?????????「し、師匠。これってほんとに忍の力なのですか？」

?????????「これが忍つてもんだ。」

?????「でたな、忍者！変身！」

なぞの男(???)は、仮面ライダー威吹鬼になった。  
鬼と、忍者がぶつかり合う。  
その戦いの結末は。

王蛇「ここか・・・祭りの場所は・・・。」

突然、王蛇が現れた。

デIFOォース「相手してやる！」

「ソードベント」

王蛇は、ソードベントで自分の剣を呼び出した。

デIFOォース「じゃあ、これだ！」

「フォームライド 電王 アックス」

「アタックライド 泣けるでえ！」

デIFOォース「俺の強さは、泣けるでえ！」

王蛇「ふざけるな・・・！」

「アドベント」

王蛇「ベノスネーカー、降臨。」

ベノスネーカーは次々と毒を吐く。

俺は、それをよける。

王蛇「雑魚が。」

「ファイナルベント」

王蛇は、王者の紋章のあるファイナルベントを使った。

王蛇は俺に向かって走ってきた。

たちまち、ジャンプし、こっちに向かってくる。

「アタックライド ツツパリ」

デIFOォース「面白いこと考えたぜ！」

王蛇のすばやいキックと、俺の高速ツツパリ、どっちが勝つか？

ドガドガドガドガ！

黄色いツツパリと紫の足がぶつかり合う。

「ファイナルベント」

??「ハア　　！」



王蛇は、なんと、サバイブのカードを使って、王蛇サバイブとなった。

ベノスネーカーが、ベノランザーとなる。

王蛇「行くぜ！」

「ファイナルベント」

ジェノランザーはバイク体となり、龍騎サバイブにぶつかろうとする。

「ファイナルベント」

ドラグランザーバイク体に乗る龍騎サバイブ。

そして、王蛇サバイブにぶつかろうとする。

決まる。勝敗が。

「ファイナルアタックライド ファアファアファイズ」

突然そんな音がした。

????? 「おりやあああああああ！」

ピンクと黄色の光弾が、ドラグランザーとジェノランザーを直撃する。

王蛇サバイブも、龍騎もノーマル体に戻る。

光弾を出したものの正体はすぐに分かった。

ディケイド。

まったくそのとおり。

コンプリートフォームになっているディケイドは、おそらくファイズを出現させて光弾を同時発射したに違いない。

ディケイド「ここがミラーワールドか……。なかなか楽し〜ね〜。

「

ディフォース「カメンライド W」

「ファイナルアタックライド ダダダW」

ディフォース「ジョーカービッグスリッパー!!!」

俺がそう言つと、亜樹子のスリッパが出現した。

俺はそれをはき、ディケイド、王蛇、龍騎をビシバシたたいた。

王蛇「ぐわあ！」

龍騎「嘘だろおお！」

ディケイド「ケンタ！やめろ！」

最後の一発をたたこうとした瞬間、俺に向かって爆風が起こった。そのほうを見ると、ゾルダがいた。

おそらくシユートベントだろう。

ゾルダ「ごちゃごちゃしたのは嫌いなんだ……。」

「アドベント」

ゾルダはマグナギガを召還した。

ゾルダ「終わらせてやる！」

???「そうはさせるか！」

「サバイブ」

「ファイナルベント」

???「はあ！」

ゾルダ「ぐわあああああああ！」

龍騎「れ……蓮……。」

蓮 仮面ライダーナイトの変身者である。

ナイト「北岡……これでお前も終わりだ！」

北岡 北岡秀一、仮面ライダーゾルダの変身者である。

「サバイブ」

ゾルダはサバイブとなった。

ゾルダ「これぐらいでは俺はやられないんだからな！」

???「お前ら……すべてを受け入れる……！」

全員突然現れたライダーのほうを振り向く。

そこにいたのは、黒い龍騎「リュウガ」だ。

リュウガの後ろから、次々とライダーが現れる。

左から、シザース、ライア、ガイ、タイガ、インペラ、オーディン、ベルデ、ファム、オルナタタイプ、オルナタタイプ・ゼロだ。

ディフォース「なんだなんだ？」

ディケイド「ライダー大戦……。」

「ファイナルベント」

突然、ゾルダが、ファイナルベントを発動した。マグナギガがマグナランザーとなり、マグナランザーがバイクとなる。

そして、マグナランザーが、空中に舞い上がり、たくさんの銃弾を雨のように浴びせる。

俺たちは、続々と逃げる。

ディフォース「うわあああああああああ！」

俺は、ミラーワールドから抜け出てきた。

変身解除された。

王蛇「ああああああああ……。」

王蛇も変身解除された。

しかし、王蛇に変身していたのは、浅倉威ではなかった。

???「お前、ケンタかよ。」

突然、王蛇の変身者にそういわれた。

ケンタ「そうだけど？って、カイト！」

その少年は、カイト 野々村カイトだった。

カイト「やっぱケンタだ！で、お前もライダーなんだ？」

ケンタ「それで、この世界の話でも聞かせてもらおうか。」

カイト「ああ、この世界は、龍騎の世界。さっきのように、ライダー同士が戦っている。カードデッキは神崎士郎が作ったものだ。これだけかな。俺の知っている情報は。」

そんな話をしていると、ミラーワールドから、龍騎 城戸真司が出てきた。

真司「いたたたたたた……。」

カイト「おい、お前、龍騎だよな？バトルだ。」

ケンタ「いきなり……おい！」

真司「なんなんだよ！って、そのカードデッキは、王蛇の……。」

ケンタ「もう、どうなってるんだよ！」

蓮「カードデッキを渡してもらおうか！」

後ろには蓮がいた。

蓮「お前のようなガキには使えない！渡せ！」

カイト「何のつもりだ！」

??「ちよつと蓮・・そんなやり方はないでしょ？」

真司「優衣ちゃん！」

優衣 神崎優衣。神崎士郎の妹で、20歳までしか寿命がない。

たしか、真司のせいで、ライダーバトルが巻き起こり、優衣が20歳の寿命しかないようになってしまったのだが。

蓮「優衣、何のつもりだ。」

優衣「たしかに、子供にはまだライダーバトルは早いけど、強引にやるのは間違っていると思う。理由を説明しなきゃ。」

蓮「分かった。ねえ、それを持ってたら、死ぬぞ。」

真司「それを持ってたら君も危ないんだ。」

カイト「そんなのとつくの昔から知ってるよ。それを覚悟して戦っているんだ。」

蓮「なんだと・・・！」

ケンタ「おい！カイト、何のつもりだ！ 　ん・・・ん・ん・・

・！！」

蓮「危ない！」

俺は再びミラーワールドに引きずり込まれた。

ケンタ「いててててて・・・。なんだ・・？」

??「お前が、仮面ライダーディフォーアなのだな・・・。」

ケンタ「あなたは、神崎士郎・・。」

士郎「そのとおりだ・・・。このカードがお前には必要だ。」

士郎はカードを差し出す。

そのカードは、ガンバライド型のカード（ディケイドやディフォーアの使うカード）だった。

なぜ、神崎士郎がこれを？

士郎「戦え……戦え！」

俺は、そのカードに目を通す。

そのカードには、「コンタクト（契約）」と書いてあった。

俺は、士郎に話し掛けようとしたときには、もういなかった。

ケンタ「いつたい……」

ピュウウウウウ……。

突然、どこかから、一枚の絵が飛んできた。

銀と赤の混ざった龍の絵だ。

ケンタ「なんだ？」

優衣の作ったモンスターの絵かと思いきや、右下に書いてあった、

作者名は違った。

ガオオオオン！

次は、何かの雄叫びだ。

俺は、そのほうを向いた。

そこには龍がいた。

俺の手元にあるこの絵の龍と同じ。

まさか、この絵、士郎が飛ばしたんじゃないのか……。

そして、このモンスターと契約しろって言っているんじゃないのか？

俺は、契約のカードを、龍に見せた。

すると、龍は、「コンタクト」のカードの中に入っていった。

その瞬間、俺はデIFOォースに変身した。

しかし、鏡に映る今回のデIFOォースは違う。

今まで銀だった腕が赤色になっている。

胴体は、赤色に銀だ。

顔は、銀に赤だ。

デIFOォース「これが俺の本当の姿だ！」

シザース「その力をためさせてもらおうか！」

インペラー「さてと、まずはお前からだ。」

タイガ「とつちめる。」

ベルデ「準備はいいか？」

デイフォース「はじめるぞ！」

「アタックライド アドベント」

俺は、「コンタクト」のカードをデイフォースライバーに装填した。すると、あの龍が出てきた。

タイガ「あれつてもしや……。。」

ベルデ「伝説の龍……。」

シザース「ドラグフォース!!」

インペラー「それもゲットするために倒す！」

「ファイナルベント」

ナイト「はあく！」

ベルデ「ああああああああ！」

突然のナイトの乱入でベルデがやられた。

王蛇「はあ……。はああああああ！」

王蛇はソードベントで相手を切りつける。

シザース「行くぜえええ！」

「ファイナルベント」

王蛇「でええええい！」

王蛇はベノクラッシュでシザースを倒し、インペラ もけりつけた。すると、二人同時に倒すことに成功したのだ。

タイガ「はあああああああ！」

「アドベント」

すると、タイガの契約モンスター、デストワイルダーが出現した。

「ファイナルアタックライド デイデイデイフォース」

デイフォース「はあああああああ！」

俺は、ドラゴンライダーキック（多分）を、タイガに食らわせた。ドオオオオオオオオオオオン！

ものすごい爆発が起こる。

リュウガ「すべてを受け入れる……。。」

デイフォース「闇野郎が。ふざけんじゃねけぞ！」

リュウガ「お前、そんな事いうとは、いったいお前は何なんだ！」  
ディフォース「通りすがりのガンライダーだ！」  
すると、新しいカードができた。

王蛇「なんか来たか？」

ディフォース「じゃあ、これ使っぜ。」

「ファイナルフォームライド オオオ王蛇」

「ファイナルライド ガタツク」

ガタツクの効果：お互いの攻撃力2倍になる代わりにおたがいの防御力が半分になる。

王蛇は、ベノスネーカーにファイナルフォームライドされた。

「ファイナルアタックライド オオオ王蛇」

ディフォース「ベノクラーツシュ！」

リュウガはやられてしまった。

それとともに俺は気を失ってしまった。

士たちは、戦っていた。

「ファイナルアタックライド デイディディケイド」

デイケイドはデイメンションキックで、オーディンを倒す。

「ファイナルアタックライド クククウガ」

さらにクウガにカメンライドした後、ファムまで倒した。

王蛇「俺は、もっと戦ってみる……。この世界のために！」

王者はそう太陽に向かって叫んでいた。

????????「ディザーク師匠。行きますよ！」

ディザーク「行こうかディヴォルバー。またの名を、青空コウジともいう。」

青空コウジの変身するディヴォルバー。

彼はいったい何者なのか！

Episode「KIVA」 第5楽章 / たくされた切り札

ケンタ「ん．．．んんん．．．どこだ．．．ここ。」  
??「お目覚めになりましたか。」

ケンタ「お前．．．レイ．．．。」  
レイ「レイと呼ぶのではなく、レイ女王かレイ様とお呼びくださいませ。」

ケンタ「それじゃ、ここ、どこの世界？」

レイ「キバの世界でございます。」

キバの世界．．．。

じゃあ、龍騎の世界の戦いはどうなったのだろうか。

俺の手には、神崎士郎が渡したあの絵が握られていた。

レイ 神崎レイ。

俺の幼馴染である。

その彼女が、こんなキラキラな服装で、俺にこんなしゃべり方をするなんて、何かの間違いっぱいけど、現実が変わらないのである。

そんな彼女は、俺をぎゅっと抱きしめてきた。

一応、彼女は、男子から注目を浴びたりしているし、結構人気者らしい．．．そんな彼女に抱きしめ．．．もう、訳がわからなくなっ  
た．．．。

俺の頭の中は、故障しているかのようだった。

レイ「ケンタ様．．．。ここに来たのだから、私に仕えてください．．．。」

そんなレイの声も聞こえず、俺は、俺を失ってしまったんだ。

士「ケンタ ! ケンタ !」

俺は、そんな声で目を覚ました。

士がこっちにきていた。

レイ「だれですか?」

士「通りすがりの仮面ライダーだ。」

レイ「仮面ライダー?ならば、私とケンタ様がお相手いたしますわ。」

士「なんのつもりだ。ケンタ。」

レイ「いきますわよ!キヴァイアット!」

キヴァイアットという、キバットが表れた。

キヴァイアット「ガブツ!」

レイは、変身待機状態となった。

それにつられるかのように、俺は、しゃべりだしていた。

そのときは、気を失っていた。

ケンタ「変身。」

レイ「変身。」

「カメンライド デイフォース」

そのときのデイフォースは、キバのようだった。

士「結局こうなるってか。変身!」

「カメンライド デイケイド」

デイケイド「俺が相手してやる!」

キヴァイア「いきますわよ。ケンタ様。」

デイフォース「かしこまりました。」

デイケイド「ケンタ、目を覚ませ!」

デイケイドは、キヴァイアを剣で突こうとする。

すると、デイフォースがそれを防ごうと、自分に剣を突かせた。

キヴァイア「ケンタ様……。」

デイフォース「ぐああああ……あつあああつ……。」

デイフォースは、そのままぐつたりと倒れた。

デイケイド「いくぜ。」

「ファイナルアタックライド デイデイデイケイド」

キヴァイア「ウェイクアップ……ですの。」



デIFOォースは地面にたたきつけられた。

地面が黒いキバの紋章がつく。

デIFOォース「うああああああああああ……。」

デIFOォースは変身解除された。

キバ「大丈夫……君。」

ケンタ「……。」

俺は、気絶していた。

光写真館。

俺は、水のシャキつとした感覚で目が覚めた。

士「大丈夫か？」

ケンタ「まあ、大丈夫だ。」

士「そうだ。この世界はキバの世界。なぜ、俺に使命を教えたやつがここにいる？知ってるか？ケンタ。」

俺は、仮面ライダーマニアである。

簡単な話だ。

ケンタ「士が行っている青年は、名前を、紅渡という。仮面ライダーキバの変身者。初期のころは、気弱なタイプだった。それが、夏海さんたちに、”デイクイドに、物語はありません。”って言えるようなやつになってるとは思わなかったけど。」

士「ようするに、その紅渡とかいうやつは、仮面ライダーキバってことは間違いないんだな。」

ケンタ「ああ。それと紅渡は、ファンガイアの王<sup>キング</sup>なんだ。」

士「王だと？」

ケンタ「ああ。自分の兄を救うため、自ら王になったただけだな。」

士「ふうん。そいつとカタをつけてやる！」

ケンタ「なんのために？」

士「そいつは、ファンガイアの王だ。そいつを倒せばファンガイアが消滅するようなものなんだろ？」

ケンタ「そうとは言っていないけど。」

士「どういうことだ。」  
ケンタ「要するに、キバはファンガイアを倒すだけ。」  
士「なに言ってるんだ？」  
ケンタ「士、この世界で、ファンガイアは恐れられている存在。それを退治するのもファンガイア、それだけだ。」  
ファイズも同じような感じである。  
オルフェノクを倒すのはオルフェノクみたいに。  
ケンタ「だから、キバと協力して、ファンガイアを倒せばいいんだって。」  
士「じゃ、ユウスケ、ケンタ。行くぞ！」  
士は、ユウスケと俺を連れて外に出た。

商店街。

士「それにしてもこみやがってる。」  
ユウスケ「士、何しに来たんだ？」  
士「キバを捜しに来たんだ。」  
ケンタ「無駄だと思うって……あれ？」  
士「どうかしたか？」  
ケンタ「なんだよ……。レジェンドルガじゃねえか。」  
商店街の広場では、真っ青な顔になった人間たちが振子のように動き、座っていた。  
ユウスケ「レジェンドルガ？」  
ケンタ「ああ。ファンガイアよりも恐れられている存在。ファンガイアは人を殺すタイプだけど、レジェンドルガは人をのつとるタイプだ。」  
士「で、そのレジェンドルガとかいうやつはどこにいるんだ。」  
ケンタ「あの真っ青な人だよ。のつとられているんだよ。」  
ユウスケ「士！あれって、夏海ちゃんだよ……。」  
士「夏海!!!!!!」  
士は、叫んだ。

すると、夏海はこうぶつぶつと答えたのだ。

夏海「デイケイド・・・クウガ・・・デイフォース・・・破壊・・・する。」

士「夏海・・・！」

士はあることに気づいた。

夏海の顔が真っ青だった。

ユウスケ「ケンタ！夏海ちゃんを助ける方法は？」

ケンタ「助ける方法はな、レジエンドルガの王、つまり仮面ライダーアークを倒すことかな。」

士「アークだと？」

ケンタ「ああ。最初から巨大なライダーだよ。」

そう言いかけたときには、レジエンドルガに操られた人々たちは、こっちに来ていた。

夏海「デイケイド・・・デイケイド・・・デイケイド・・・デイケイド・・・。」

ケンタ「士！無駄に攻撃しても無駄だからな！それと、逃げるぞ！」  
士「そうするしかないみたいだな。」

ケンタ「変身！」

「カメンライド デイフォース」

俺は、デイフォースに変身した。

そのほうがすばやく逃げれると思ったから。

「ファイナルライド デンライナーゴウカ」

すると、デンライナーが出現した。

デイフォース「乗るぞ！」

俺たちはデンライナーに乗った。

俺は変身解除した。

まずいと思ったが、まだデンライナーは出現したままだった。

ケンタ「ふう〜。良かった良かった。」

????「なんで、デンライナーが出現したままか教えて欲しい？」  
どこかから声が聞こえた。

ケンタ「何で？」

「???」それは、私のライナーなんだからだよ！」

ケンタ「まさか……。」

デンライナーにはあの人が乗っていた。

ケンタ「あ……亜由美？」

目の前には亜由美がいた。

電王の世界にいたんじゃないかと思った。

亜由美「そだよつ。それと、もう一人助っ人がいるんだからね。」

ケンタ「でも俺は助っ人なんか呼んでいないけど……。」

「???」海東さんが呼んだ。」

後ろから声がした。

俺は、後ろを向く。

そこには……。

ケンタ「カイト。」

カイト「大当たたり〜。」

ケンタ「海東さんが呼んだんだ……へえ〜。」

大樹「土がピンチらしいからね、へへつ。」

海東さんも来ていたようだ。

土「海東……ありがとな。」

土らしくない土の言葉を俺は聞いた。

カイト「でもさ、海東さんから聞いたけど、何でまた、レジェンドルガなんかが。」

ケンタ「その秘密、解きたいだろ？それなら、ここデンライナーだろ。じゃあ、行ってみようぜ。」

カイト「どこに？」

ケンタ「2004年7月24日にさ。」

カイト「なんでだ。」

ケンタ「勘だ。」

カイト「はあ？」

ケンタ「とにかく行くぞ。」  
デンライナーは走っていった。

2004年7月24日。

ケンタ「暑い……。」

カイト「お前がこの時間選ぶからだ……。」

士「この時間かも知れねえぜ……。」

亜由美「あそこに……あれ、何？」

顔が真っ青になった人が、座って、振子のようになっている。

ケンタ「レジエンドルガ……。」

そう俺がつぶやいたとき、ファンガイアが大量に現れた。

ファンガイアの顔が、金色のミイラみたいだ。

そうか、レジエンドルガに操られているのだ。

ケンタ「行くぞ！」

カイト「変身！」

亜由美「変身！」

士「変身！」

大樹「変身！」

ユウスケ「変身！」

ケンタ「変身！」

「クロノスフォーム」

「カメンライド デイケイド」

「カメンライド デイエンド」

「カメンライド デイフォース」

「デイフォース「行くぜ！」

「カメンライド 龍騎」

「アタックライド ストライクベント」

「デイフォース「はあああああああ！てやあ！」

俺は、ストライクベントで、レジエンドルガたちを焼き尽くす。

「アタックライド ギガント」

ディケイド「はあああああ！」

ディケイドは、ギガントでレジエンドルガたちを粉碎する。

「アタックライド ブラスト」

ディエンド「やられてみたら？」

ディエンドはブラストで相手を直撃する。

クロノス「はあああああああ！」

「ソードベント」

王蛇「はあああああああ！」

二人は、レジエンドルガを刺す。

クウガ「てやあああああああ！」

レジエンドルガを殴るクウガ。

そして、このエリアのレジエンドルガたちを倒した。

そのとき、世界の壁からイマジンが出てきた。

イマジン「ふはああつあああああつあああ！はあつ！」

イマジンは、指をぱちんと鳴らした。

そのとたん、俺たちは真つ白な何かに包み込まれたようだった。

俺は、白い世界で倒れていた。

ケンタ「何だ、ここは……。」

「???」お前が、仮面ライダーディフォーか。」

ケンタ「あなたは……、父さん？」

「???」そうだ。俺は、桜坂タカシ。」

そこには、俺の父さんがいた。

ケンタ「なぜ、父さんがここに？」

タカシ「これを。」

ケンタ「これは……。」

タカシ「また会おう！」

俺は、また気を失ってしまった。

俺は、今度は、路上の上で倒れていた。

ケンタ「ここは、何なんだ？」

女性「きゃあああああああ！」

どこかからかそんな声が聞こえた。

ケンタ「変身！」

「カメンライド デイフォース」

俺は、デイフォースに変身した。

すると、そこには、ファンガイアとイクサがいた。

イクサ「待ちなさい！」

渡「名護さん！変身！」

そこに、渡が突如現れた。

キバット「キバっていつくぜ〜！」

イクサ「キバ、行きますよ！」

「ウェイクア〜ップ！」

「ジャツジメント」

イクサ「はあ！」

キバ「はあああああああああ！」

二人の必殺技ファンガイアは消滅した。

そんな時、仮面ライダーアークが登場した。

アーク「お前ら、ぶつ殺す！」

デイフォース「かかってこい！」

レイ「変身！」

レイは、キヴァイアに変身した。

デイフォース「レイ！」

キヴァイア「行きますよ！」

すると、ライドブツカーからカードが出てきた。

「デIFOォース「ちよつとくすぐつたいぞ。」

「キVァイア「ちよつと、ケンタ様、いったいなにをやるのですか？」

「ちよつと・・・恥ずかしいです・・・。」

「キVァイアは何を考えているのだろうか？」

「まあ、いい。」

「デIFOォース「そういうことじゃないから、やるぞ！」

「ファイナルフォームライド キキキキVァイア」

「俺は、キVァイアの背中を開くような動作をした。」

「すると、キVァイアがザンバットソードのようなものに変形した。」

「名を、キVァイアソードという。」

「ファイナルアタックライド キキキキVァイア」

「デIFOォース「はああああああああああ！」

「キVァイアソードを俺は、アークに斬りつけた。」

「アーク「ぐがあああああああああああああああああ！」

「アークは死にかけたが、だが、まだ生きていた。」

「デIFOォース「ならば、これだ！」

「フォームライド デIFOォース オフェンシブ」

「これは、父さんが俺に託したカードだ。」

「ファイナルアタックライド デイデイデIFOォース」

「ウエイクアップ いっくよお〜！」

「キVァイアのウエイクアップ音はそんなものらしい。」

「デIFOォース「はああああああああ！」

「キVァイア「はああああああああ！」

「二人は、アークに向かってパンチした。」

「すると、アークは、爆風と共に消え去った。」

「俺たちは、変身解除した。」

渡「一緒に戦ってくれて、ありがとう。」

啓介「その気持ち、忘れないで欲しい。」

ケンタ「レイ、お前、いいやつだな。」

そう言ったとき、ポツとレイの顔が赤くなった。

渡「どうしたの？」

レイ「なんでもないよ!」

レイは、そう言いきった。

Episode「BLADE」 切り札は自分だけ

俺は、何かの気配を感じた。

あれは………ジョーカー？

あのアンデットの？

ジョーカー「こい！」

ジョーカーは俺たちに向かって爆風をもたらした。

そして、倒れている俺を抱きかかえ、どこかへ消えていった。

ケンタ「ここは………BOARD？」

BOARDとは、剣崎一真たちが働いている職場である。

ケンタ「ブレイドの世界か……。」

俺は、ブレイドの世界に来たようだ。

BOARDにいるのだから、そうだろう。

何か、話し声が聞こえた。

気になったので、耳を傾けてみると。

それは、剣崎一真とBOARDの社長の声だった。

一真「社長、連れてきましたよ。例のエッジの候補者。」

社長「ご苦労だった。剣崎君。」

一真「はい！」

そんな時、非常ベルが鳴った。

アナウンス「アンデット出現、アンデット出現、直ちに仮面ライダー

ーは出勤せよ！」

アンデット「……よし、行ってやる！」

俺は、出口に向かって走り出した。

社長「どこに行くんだ！」

俺を呼び止める声なのだろう。

だが、そんなことはどうでもいい。

俺は、ただ、走っていた。

社長「剣崎君！追うんだ！」

「真「分かりました、変身！」

「ターンアップ」

「真はブレイドに変身した。」

ケンタ「やっべ。」

「カメンライド デイフォース」

俺は、何も言わず、変身した。

「ファイナルライド オートバジン」

俺は、オートバジン・バトルモードを呼び出した。

俺は、それに乗り込んだ。

ブレイド「待てー！」

ブレイドは、専用バイク・ブルースペーダーで追っかけてくる。

俺は、アンデットを見つけた。

そこに、降りた。

フィリップ「そこにいたのか、ケンタ。行くよ翔太郎、変身！」

「フアングジョーカー」

フィリップさん翔太郎さんとはWに変身した。

W「さあ、お前の罪を数えろ！」

アンデットの中には、ジョーカーやローチがいた。

怪人たちがいきいき鳴いている。

ブレイド「な・・・ライダーが二人？どういうことだ？」

デイフォース「行くぜ！」

「フアング マキシマムドライブ」

Wはいきなりマキシマムドライブを発動させた。

W「フアングストライザー！！！！」

ジョーカー「はあ！」

ジョーカーの攻撃にWが倒れ、変身解除された。

フィリップ「あああつあああ！」

フィリップさんはその場に倒れた。

翔太郎「フィリップ　　！！」

翔太郎さんがそれを感じたように駆けつけてきた。

翔太郎「しょうがねえ、変身！」

「ジョーカー」

翔太郎さんは、仮面ライダージョーカーに変身した。

ジョーカー「さあ、お前の罪を数えろ！」

（作者注：ここから、戦闘が終わるまで、カリス＝アンデットのジョーカーで、W＝仮面ライダージョーカーと表記します。）

カリス「ライダーのくせに……。」

W「ライダー、ライダーって、うっとうしいんだよお！」

「ジョーカー マキシマムドライブ」

W「ライダー・キック……。はあああああ！」

Wは、紫に輝くパンチを食らわせた。

すると、カリスは痛そうにしていたが、一瞬のうちに消えてしまった。

Wは変身解除した。

翔太郎「あれがアンデットか。」

ケンタ「そうだ。」

俺たちは変身解除した。

ブレイド「エッジの候補者……。なぜ逃げた……。」

ブレイドはかなり怒っているようだ。

ケンタ「さつきからきになっていたんだが、エッジって何だ？」

俺は聞いてみた。

ブレイド「BOARDの新ライダーさ。」

ケンタ「新ライダー？」

ブレイド「ああ。しかしそれは、子供しか変身できない短所があった。」

ケンタ「だから、俺をBOARDに連れて行っただけか。」

ブレイド「ああ。けどな、お前はそれを裏切った！」

ケンタ「だからなんだ？」



「エクストリーム マキシマムドライブ」  
Wはマキシマムドライブを実行した。  
「アタック アクセル ファイア ブレイジングファイア」  
エッジ「エツエツエツエツエツエツエツエツエツエツ！」  
エッジは刀でWを斬った。  
W「ぐわああああ！」  
Wは転げ落ちた。  
ケンタ「なんて力だ……。」「  
エッジ「劍崎さん……。あなたはもういらない。死ねえええええええ！」  
エッジは一真のほうに向かって剣を振っていた。  
士「やめろおおお！」  
「カメンライド デイクライド」  
士がこつちに向かって走って、デイクライドに変身し、エッジの剣を受け止めた。  
エッジ「貴様、邪魔する気が！」  
一真「お前はデイクライド……。死んだのではなかったのか！」  
デイクライド「俺は消えない！俺が世界そのものだからな。」  
一真「そうか……。」「  
デイクライド「で、エッジだっけ？倒させてもらおうか！」  
「アタックライド スラッシュ」  
デイクライドはライドブッカーをソードモードにし、エッジに立ち向かった。  
デイクライド「ハア！デアアアアア！」  
エッジ「その程度か。」  
「イリユージョン」  
エッジはまた新しいカードをスキャンした。  
すると、エッジが分身した。  
デイクライド「そういうの、こつちにもあるぜ。」  
「アタックライド イリユージョン」

エッジ「ハアアアアアアア！」

デイケイド「デヤアア！」

エッジがぶつかり合い、火花が散る。

そして、ついにデイケイドが押された。

エッジ「死ぬ。」

「スラツシユ インビジブル イリユージョン トリックアタック」

エッジは第2の必殺「トリックアタック」を発動させた。

デイケイド「一真、力を貸せ。」

一真「分かった。変身！」

「ターンアップ」

「ファイナルフォームライド ブブブレイド」

デイケイドはブレイドをブレイドブレードにファイナルフォームラ

イドさせた。

「ファイナルアタックライド ブブブレイド」

「アタックライド クロックアップ」

デイケイドはクロックアップした必殺切りでエッジに切りかかった。

エッジ「グヘエエエ……。やってくれるじゃねえか……。

これならどうだ？」

エッジは一枚のカードをスキャンした。

「バースト」

ケンタ「まずい！」

火花を散らせる剣がデイケイドに襲い掛かろうとしたとき。

たくさんの光球が地上に降り立った。

エッジ「なんだ？」

エッジが光球のほうをふ振り向いた瞬間、たくさんの電子音が聞こ

えた。

「テラー」

「クレイドール」

「ウエザー」

「ユートピア」

「タブー」

この音は、ガイアメモリ！

大樹「そこにいたか、ミュージアム！変身！」

突如、海東さんが乱入してきた。

「カメンライド デイエンド」

デイエンド「やっちゃおうよ？」

「カメンライド オーズ エターナル アクセル」

「タ・ト・バ タ・ト・バ・タ・ト・バ」

「エターナル」

「アクセル」

そんな電子音が流れてから、3人のライダーが出てきた。

テラー「それだけではないのだ！いでよ、グレイブ！」

どうやら、グレイブまでいたようだ。

人がここまで走ってきた。

この人は……！

デイエンド「兄さん……。」

純一「久しぶりだな！大樹。変身！」

純一はグレイブに変身した。

デイエンドの兄、純一はグレイブなのだ。

グレイブ「新しい力を見せてあげよう。」

グレイブはカードをスキャンした。

そのカードは、ラウズカードではなく、ガンバライドのカードだった。

「グレイブ」

そんな音が鳴った。

俺はこのとき、グレイブの新能力に気づいた。

俺と同じように、スペシャルカードが使えるようになったのだ。  
グレイブの効果：必殺技の威力+600。  
グレイブ「行け、ドーパント！」

オーズ「俺たちが相手だ！」

「タカ・カマキリ・バツタ」

オーズはタカキリバに変身した。

アクセル「井坂・・・シンクロウ！」

ウエザー「久しぶりだな、アクセル！」

「アクセル マキシマムドライブ」

ウエザー「ふあああああああ！」

アクセル「うらあああああああ！」

二人の炎がぶつかり合う。

どうやら、アクセルがウエザーを倒したようだ。

しかし、ウエザーを倒した瞬間、アクセルは消えた。

ケンタ「俺も行くぜ！変身！」

「カメンライド デイフォース」

エッジ「ハアアアアアア！」

デイフォース「ウガアアアアアアア！」

俺は、ユートピアと、エッジはクレイドールと戦った。

ユートピア「はあ！」

「カメンライド 電王」

デイフォース「一気にけりつけてやる！」

「ファイナルアタックライド デデデ電王」

デイフォース「はあああああつあああああ！」

ユートピア「ダアアアア！」

二つの赤い攻撃がぶつかり合う。

ユートピアはメモリブレイクされた。

エッジ「貴様……ぶつころおおす！」  
エッジはさつきから放っていた火花をクレイドルに向けた。  
すると、クレイドルはバチバチと攻撃され、メモリブレイクされ  
た。

エッジ「やったぜ！」

ディケイド「やってやる！」

「クウガ・アギト・龍騎・ファイズ・ブレイド・響鬼・カブト・電  
王・キバ　ファイナルカメンライド　ディケイド」

ディケイドはコンプリートフォームに変身した。

テラー「はあああああああ！」

テラーは頭部に眠っている怪物を召還した。

ディケイド「なら、これだ！」

「響鬼　カメンライド　装甲」

ディケイドは装甲響鬼を召還した。

「ファイナルアタックライド　ヒヒヒ響鬼」

ディケイドと装甲響鬼は二つの巨大剣で召還獣を破壊した。

ディケイド「今だ！オーズ」

オーズ「分かったぜ！」

オーズは、メダシャリバーを出現させ、テラーに切りかかった。

テラー「ガアアアアアアアア！」

テラーも破壊された。

エターナル「貴様は雑魚だ。」

タブー「なに？」

エターナル「はあああああああああ！」

タブー「やあああああああ！」

エターナルのすさまじい攻撃がタブーを一瞬のうちに消した。

ジョーカー「貴様ら、これで終わったと思うなよ……。」

ジョーカーが、大量のローチを連れてやってきた。

翔太郎「そのつもりだぜ！」

フィリップ「行くよ！」

翔太郎「変身！」

フィリップ「変身！」

「エクストリーム」

二人はサイクロンジョーカーエクストリームになった。

デイケイド「そうだ！」

デイケイドはあるカードを取り出した。

「アタックライド サイクロンサイクロンエクストリーム ジョー

カージョーカーエクストリーム」

デイケイドはWの背中をつかんで、それを開く動作をした。

すると、サイクロンだけのエクストリームと、ジョーカーだけのエ

クストリームになった。

(作者注：本当にこれがしたかったので、すいません。アンデットのジョーカー⇨ジョーカー Wのジョーカージョーカーエクストリーム⇨エクストリームで表記します。また、サイクロンサイクロンエクストリーム⇨サイクロンです。)

エクストリーム「やるぜ！」

ジョーカー「来い……！」

サイクロン「かかって来い！」

ローチ「うぐやあつかかかあああつああー！」

「サイクロン マキシマムドライブ」

サイクロン「サイクロンツイスター！」

サイクロンは緑の風でローチを舞い上げらせ、落下させた。

ローチ「ズビブヤアアアアアアアアアアアアアアアアア！」



名づけて、「サイクルエッジ」だ。

デイフォース「乗るぜ。」

俺は、サイクルエッジに乗った。

オーズ「これを使って！」

オーズはタコ型カンドロイドを全回封した。

すると、カンドロイドが道を作ってくれた。

デイフォース「我慢してくれよ！」

俺は、ペダルをこぐ。

すると、ありえないほどのスピードで道を駆け抜ける。

そして、14の顔のところに来た。

「ファイナルアタックライド エエエエッジ」

そして、俺は、このカードを使ったんだ。

すると、サイクルエッジがスライダーモードに変身した。

俺はアギトになった気分だった。

そして、サイクルエッジだけ、14のほうに飛んでいった。

ガチン！

14の肉体は、サイクルエッジでは突き抜けられなかったようだ。

だが、それでもいい。

俺は、戦えるからな！

「ファイナルアタックライド デイデイデイフォース」

「ロイヤルストレートフラッシュ」

「ファイナルアタックライド デイデイデイエンド」

俺とブレイドは同時攻撃をした。

そして、デイエンドはグレイブを撃った。

と思いきや、14を狙った。

14は肉体の内側から大爆発した。

グレイブ「く……。覚えておけ！」

グレイブは別の世界へと去っていった。

デIFOォース「終わったな。」

そんな時、エツジは変身解除をした。

デIFOォース「え？ヤイバ？」

そう、エツジは幼馴染の剣ヤイバだったのだ。

クラスメートだ。

ヤイバ「あれ、ケンタ？奇遇奇遇。俺は、この世界でどんどんアン

デットを封印していくからな！」

デIFOォース「ガンバライド！」

俺はそう言った。

そして光写真館。

ケンタ「ここ、久しぶりだな〜！」

土「じゃあ行くか。次の世界に。」

また絵が変わった。

そして今回の絵は、オロチの絵だった。

Episode「HIBIKI」・江戸戦記/デイフォース、死す。

士「おい……なんだここ……。」

コウスケ「ド田舎っていうか……江戸時代の町みたいだね。」

ケンタ「こんなのが江戸か？農民が武器持つてるのに？」

士「確かに。」

ケンタ「だから、考えてみると、織田信長の世だったと思うんだけどな。」

農民が普通に武器を持っていることと、景色から、ここは安土・桃山時代と思っただが。

????「クイズ第1問。天下統一したのはだーれだ。」

突然、そんな声がした。

俺は、そこを振り向くと、イブキの姿があつた。

ケンタ「イブキ？なんでここに。」

イブキ「大正解！正解は、角イブキ様、この俺だ。」

ケンタ「ふざけんなって。何が天下統一だ。お前がしたのか？」

イブキ「じゃあ、農民に聞いてやんよ。おい、農民ども、俺は最強の將軍だよなあ？」

農民「そうであります。イブキ様は天下統一をした將軍でございます。」

ケンタ「嘘クサ。」

農民「何をおっしゃる！！！！！」

イブキ「勘弁したれ。」

農民「ですが……。」

イブキ「逆らう気が！！！！！」

農民「すすすすいません！」

イブキ「まあ、いい。許しておこう。」

????「そうしたほうがいいぜ。ねえ、イブキ様。」



案の定、王蛇は音撃鼓をベノクラツシユで叩いた。

王蛇「どおおおうだ！」

火炎大将「う・・・うがあああああああああ！」

火炎大将は消えた。

しかし、何か気を感じる。

すると、上から何かを通り抜けた。

茶色い尾、白い毛、赤い頭部を持っている。

このことから考えると・・・オロチ。

デイフォース「オロチか！」

「カメンライド ブレイド」

デイフォース「行くぜ！」

俺は、オロチに届くように力をこめ、ジャンプした。

しかし、俺の体は届かず、その場に落ちてしまった。

デイフォース「ならこれだ！」

「フォームライド ブレイド ジャック」

俺は、ブレイドジャックフォームにカメンライドした。

これなら、翼もある。

俺は、この力を使って、オロチを倒すことにしようとしたが・・・。

オロチの力はとてつもなく強いものだった。

そのとき、こんな音が聞こえた。

「カイジンライド テラードーパント」

「ファイナルライド クライス要塞」

デイエンド「全員終わりだ。」

なんか、海東さんがそんなこと言っている。

まさか・・・。

海東さんがこの怪獣らを召還したのか？

クライスらはオロチのいるこっちに近づいていく。



そこには、ベルトをつけたアポロガイストがいた。

アポロガイスト「そのとおり。」

ユウスケ「なぜお前が・・・生きているんだ!」

一度アポロガイストは、俺の手で倒したはずだ。

アポロガイスト「教えてやるう・・・あの世でな!」

アポロガイストは銃を構えた。

士「変身!」

「カメンライド デイケイド」

アポロガイスト「デイケイド、一度お前に倒されたが、次はやられたりしないぞ・・・。」

デイケイド「くらえ!」

「アタックライド ブラスト」

アポロガイスト「今までの私と思うなよ! ブラストメダルパワー!」

「ブラスト」

アポロガイストは腰についた3つ穴のあるベルトのようなものに、メダルを差し込んだ。

デイケイド「メダルパワー?」

俺のブラストとアポロガイストのブラストがあたりあう。

どちらも互角のパワーを持っている。

アポロガイスト「そのとおり。われわれはついにミュージアムとグリードとも手を組んだ。」

デイケイド「ミュージアム、グリード? なんだそりゃ?」

俺は分からなくなった。

こんなときケンタがいれば、解説してくれたのに・・・。

アポロガイスト「メダルコンボを見せてやる!」

「ブラスト・イリユージョン・クロックアップ」

そんな電子音が鳴った瞬間、アポロガイストは分身し、高速移動し、俺にブラスト攻撃を浴びせた。

アポロガイスト「終わりだ。」

アポロガイストはデイメンションシュートのような光線を俺にはな

った。

何10もの光線が俺に当たり、変身解除された。

アポロガイスト「貴様も死ぬ運命なのだ……。お前は世界にとって邪魔な存在なのだからな！」

士「ぐ……。」

カイト「違うな！」

アポロガイスト「なんだと？」

カイト「士はな！どんなときも世界を救う手助けをしてきたんだ！破壊者でも邪魔な存在でもないんだ！」

イブキ「そのとおりだ！俺は知ってるぞ！士は時にライダーを破壊し続けたときもある……。でもな、それは世界を救うためなんだ！そして、ライダーがすべてよみがえり、世界が平和になった。それで世界が救えたのなら、俺はいいと思う。これを、”終わりよければすべてよし”っていうんだよな？」

アポロガイスト「ガキが！何様のつもりだ！」

カイト「将軍の秘書様のつもりだ！」

イブキ「こいつの言ってる将軍様だ！」

アポロガイスト「ふざけるな！ガキのごっこ遊びに付き合ってもらるか！」

カイト「やろうぜ、変身！」

イブキ「ああ。変身！」

カイトとイブキは王蛇と威吹鬼に変身した。

王蛇「いくかあああああ！」

俺らは大きな恨みがある。

いつも三人だったのに、一人奪ったんだから。

「サバイブ」

俺は、すぐにサバイブになった。

王蛇「うがあああああああ！」

ナスカ「君の力は足りない！」

デイフォース「何だと？」

白い空間で、俺とナスカは戦っていた。

ナスカを倒せば、地上に戻るためのアイテムを授けるとか何とか言っていた。

デイフォース「ぐおおおおおおおおおお！」

「ファイナルアタックライド デイデイデイフォース」

俺は 地上に戻り、世界を救う！

その気持ちで俺の必殺キックを放った。

ナスカ「ぐ……ぐわあああああ！」

ナスカは変身解除された。

アポロガイスト「いでよ！オロチ！」

アポロガイストはオロチを召還した。

王蛇「ぐわあああああ！」

「ユナイトベント」

王蛇「ジエノサイダー！召還……！」

俺はジエノサイダーを放った。

ナスカ「デイフォース……その思い、聞こえたぞ！」

ナスカは粒子化し、ひとつの金色のドライバーの真ん中のパーツと化した。

すると、俺も粒子化していった。

響鬼「はあああああああ！はあっ！」

そのころ、肝心な響鬼はというと、オロチを追って、馬を走らせている途中、バケガニの大群に遭遇していた。

威吹鬼「くそお！オロチめ！」

俺たちは、オロチ退治に集中していた。

しかし、アポロガイストはどこかの世界に消え去っていった。

王蛇「大丈夫か！ジエノサイダー！」

デイケイド「はあああああああ！」

デイケイドでも歯が立たない。

??????「俺は 最初、かつこよくなりたかったから戦っ

ていた。だがな、今は違う。守りたいもののために戦う。それが、

俺の人生……………」

王蛇「……………」

??????「俺、参上。」

デイケイド「ケンタ！」

そこには、デイフォースの姿があった。

デイフォース「これが新しい俺の姿だ。」

金色のドライバーのパーツを取り付けた。

「ドライバーチェンジ デイフォース ライジング」

俺の体の銀色が金色に変わった。

そして、黒いラインが入り、顔の赤い部分にネガ電王のような模様  
がついている。

デイフォース「くらいな！俺の新たなるパワーをな！」

そして、新しいカードが増えた。

このカードは、ファイナルカメンライド……………！

響鬼「遅くなつたな！威吹鬼！」

威吹鬼「ああ、響鬼。やるうぜ！」

デイケイド「いいところに来たな、響鬼！」

「ファイナルフォームライド ヒヒヒ響鬼」

「ファイナルアタックライド ヒヒヒ響鬼」

「ファイナルカメンライド 電王」

デイケイドは、響鬼をヒビキオンゲキコにし、ファイナルアタック  
ライドを発動させ、俺は、電王の超クライマックスフォームに変身

した。

「ファイナルアタッククライド デデデ電王」

デIFOオース「はああああああああ！」

俺は、大空へ舞い上がり光り輝く剣でオロチを切り裂いた。  
オロチは苦しみながら地面へ倒れた。

そして、ヒビキオンゲキコがオロチに付いた。

デイケイド「はあああああはあ！」

デイケイドは太鼓をたたき出す。

デIFOオース「カードはこれだけじゃないんだぜ！」

「ファイナルフォームライド イイイ威吹鬼」

俺は、威吹鬼もファイナルフォームライドした。

すると、威吹鬼はラツパになった。

デIFOオース「カイト、使えば？」

王蛇「なら使わせてもらうぜ！」

「ファイナルアタッククライド イイイ威吹鬼」

王蛇はラツパを吹く。

「アタックライド 音撃舞紅」

俺は音撃舞紅を召還した。

デIFOオース「オロチさん！俺の歌う歌は……W！」

俺は、「劇場版 仮面ライダーW Forever Atoz 運命

のガイアメモリ」のをつたおうとすると……。

?????「ちよつとまってー！私が歌うー！」

デIFOオース「あ……亜由美？」

時空から飛んできたのだろう。

クロノスは俺の音撃舞紅を奪うと「LOVE RIDER」（ログ  
が作曲）を歌いだした。

クロノス「私がやらなきゃ誰がやるの あなたには私がないとダメだから 絶対どこかで落ちるから だから私とあなたがずっと寄り添って 生きていきたいんだ それが私の願いで あなたの願い

であって欲しい LOVE LOVE LOVE ずっとずっと  
ずっと 愛していたんだ LOVE LOVE LOVE LOVE ず  
っと ずっと ずっと あなたは私のものだから

王蛇「歌のわけが分からん……。ケンタのほうがよかったな。」

「コピーベント」

王蛇はコピーベントを発動させ、音撃舞紅を俺に渡した。

王蛇「使え！」

デIFOオース「ありがと！おい、亜由美、いっしょに歌うぞ！」

クロノス「分かったわよ！」

クロノスパージョン

俺たちは「DOUBLE RIDER」(ログが作曲)を歌うこと

にした。

(作者注：今から、地の文に歌詞を書いています)

もう止まらない ピンチの時

君が俺を助けたんだね

そうさ 仲間なんだから

ずっと そばにいるしかない 永遠に

ずっと ずっと 戦っていく

君とずっと手を握るさ

二つのベルト 合わせて

「変身！」といったなら

俺たちはひとつの魂ソウルさ

もう止まらないSOUL

回れBEAT RIDER

二つの魂 合わせて

君と戦っていくさ

僕はずっとRIDER

俺たちは歌い終わった。

オロチは無事、消え去った。

クロノスはライナーでどこかへ行った。

ケンタ「イブキ、カイト、良かったら来るか？」

イブキ「いや、いいよ。俺はここで戦っていく。」

カイト「俺も。」

ケンタ「そうか。じゃあ、俺たちは次の世界へ行くぜ。」

ガラガラガラガラ……。

次の世界は……！

パソコンの中身のような感じの絵だ。

なんだろう？ ファイズの世界か？

それとも……

Episode「AGIT」 究極の鎧ノガンバライドノキズナ

ここは、ある組織の最高機密が隠されている研究室。

ソウマ「ついに完成した・・・G5システム・・・。これでG3もG4・・・いや、アギトまでも滅ぼすことができる！まさに神のシステムだ！」

ソウマと呼ばれる青年は、にやりと笑った。

ケンタ「アンノウン・・・そうか！ここはアギトの世界か！」

士「アギトの世界・・・！」

てつきりファイズの世界かと思ったが、違っていた。

たまには俺の予想は外れるものなんだな。

俺はそう思った。

アギト「はあ！てやあ！」

アギトはアンノウンと戦闘をしていた。

そして、アギトの立っている地面にアギトの紋章がつく。

そして、アギトは、黄色いライダーキックをアンノウンにかました。

アギト「これで決まり！」

その直後にすごい爆発に巻き込まれることも知らずに。

刑事「アンノウン出現！アンノウン出現！応答せ・・・ごぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼ・・・！」

刑事はアンノウンの力により、暗殺されてしまった。

ソウマ「白峰刑事が暗殺された・・・。むごい・・・。本田マコト！行くぞ！」

マコトと呼ばれる少年は、深くうなずいた。

マコトは、早速赤い携帯電話を取り出し、「501」と番号を打った。

そして、  
マコト「変身！」  
と叫んだ。

すると、腰に、銀色のベルトが現れた。

そこに携帯電話を横から刺すと、体の色が赤くなり、たちまち赤いG3のようなライダーになった。

ライダーの緑の目はじっとアンノウンを見つめていた。

ライダーはハンドガンを取り出し、一発アンノウンに撃った。

すると、アンノウンは蒸発し、消えていった。

デIFOース「なんだ？お前は。」

ライダーから1メートルほど離れたところには、デIFOースがいた。

デIFOース「赤いG3みたいだな？警視庁もしゃれたこと、するねえ〜？」

ソウマ「警視庁でない！」

突然、ライダーの音声出力スピーカーから、ソウマの声が聞えた。

デIFOース「誰だ？」

ソウマ「私の名はソウマ。この装着員ではない。オペレーターであり、開発員である。この仮面ライダーG5のな！」

そう、このライダーの名を仮面ライダーG5という。

それに变身しているのがマコトなのだ。

デIFOース「G5？Gシリーズは懲りないねえ？」

G5「だ〜ま〜れ！この攻撃を受けてみやがれ！」

G5はガトリングガンを出現させ、俺に向かって連射した。

俺は必死によける。

しかし、そのうちの1発があたってしまった。

その痛さはかなり痛い。

いつもの弾とはどこか違う。

なにかが……。

デIFOォース「その使い道！俺が正してやる！」

「カメンライド 響鬼」

俺は響鬼にカメンライドした。

デIFOォース「くらえ！」

「アタックライド 音撃棒 烈火」

俺は、音撃棒でG5を攻撃するが、まったく歯が立たない。

そして、またあのガトリングガンを正面から何発も食らってしまった。

しかし、前よりはそんなに痛くはなかったが、痛いといえば痛い。そして、もとの姿に戻ってしまった。

デIFOォース「ちくしょお！またこれか！」

「アタックライド 音撃舞紅」

デIFOォース「次はこれだからな！」

俺は、「DOUBLE RIDER」を歌いだした。

（作者注：今から、地の文に歌詞を書いていきます）

一人でも何とかなる

つらいときは仲間を思い出すけど

そんなものはいらさない

ただ、目の前の相棒と

前に進むだけさ

心の中に秘めた思い

あまり開くことはないけど

ピンチのときや大切なときには

開いて見せてやる

心の中のツイスター

ずっと僕を襲ってる

だから立ち向かってやるのさ

そして、破壊してやるのさ

そう、僕はRIDER

仮面ライダーなのさ・・・



デIFOォース。破壊者を狩る者だったけな。」

ケンタ「だれだ！」

突然の、青年の声に俺は振り返った。

「????」私の名はアカギ。またの名を……仮面ライダーシグマ……」

ケンタ「アカギ……俺が破壊者を狩る者ってどういうことだ。」

俺はアカギに質問を投げかけた。

アカギ「デIFOォースは元々、破壊者として目覚めたデイクライドを止めるためにNEORIDERSが作ったライダーの一人だ。」

ケンタ「NEORIDERS?何のことだ？」

アカギ「NEORIDERSは、2000年創業し、その後ライダーを研究し、ベルトを作っている企業だ。」

ケンタ「大体NEORIDERSの事はわかった。要するにスマートブレインみたいなものだな？」

アカギ「そういうことだ。」

ケンタ「それと、もうひとつ質問があるんだが、ライダーの一人ってというのはどういうことだ？」

アカギ「言葉のとおり、君はデイクライドを止めるライダーの一人。君は旅の途中で不思議なアイテムを見ただろう?王蛇のサブイカ

ードやナスカドライバー、キヴァイアット等等……」

ケンタ「それがどうしたんだ。そのアイテムをライダーに与えてデイクライドを止めようとしても？」

アカギ「君の勘はすばらしい。ほかに、クロノスベルトやあのG5スーツもね。あと、オーズやエターナルのカメンライドカード、

そしてその、デIFOォースライバーやドラグフォースもね。」

ケンタ「モンスターも作るとは……。神崎士郎並の知能があるな！」

アカギ「そういうことだ!また会おう！」

素晴らしいながらアカギはほかの世界へと消えていった。

ケンタ「俺がデイクライドを止める……?」



のだよ！」

G 5「俺は・・・破壊兵器？」

ケンタ「そうさ。人間のふりして暴走してる、ただの破壊兵器だよ！」

G 5「なんだと・・・？」

ケンタ「お前の正体は知ってる。本田マコト！ガンバライドリ―グ仲間！思い出せ！俺はお前にアギトで勝った！そして、お前のG 3-？、思い出せよ！あいつ、強かったじゃねあか！そのあと、転校してきて、少し悔しいこともあったけど、楽しかったじゃねえか！」

俺は、G 5に言った。

G 5「その通りだぜ、ケンタ。俺たちは、二人で一人で・・・」

ケンタ「通りすがりの・・・」

G 5&ケンタ「ガンバライダーだ！！！！」

これで、もうG 5は敵になることはないだろう。

これが、NEORIDERSの計算とは知らずに。

ヒュウウ・・・！

ドオオオオン！

突然、黒いものが落ちてきた。

それは、人の形をしていて、二本の角が生えている。

G 5「G 4-??まさかこんなに早く・・・。」

ケンタ「G 4-??なんだそりゃ？」

G 5「G 4のデータを利用して、強化したライダーだよ。俺の力を超えている。」

ケンタ「でも、俺たちの力よりは弱い。行こうぜ！マコト！」

大樹「そこにいたか、G 4-?君。」

ケンタ「お宝狙いか？」

大樹「それよりも、狩るぞ！変身！」

ケンタ「変身！」

「カメンライド デイエンド」

「カメンライド デイフォース」

俺たち二人はライダーに変身した。

デイフォース「新たなるカード・・・！」

「ファイナルフォームライド ジジジG5」

俺は、G5のファイナルフォームライドカードを使い、G5をファイナルフォームライドした。

すると、赤い、G4ギガントのような形になった。

俺はそれを肩に乗せて弾を発射させた。

すると、G4-?それを痛がるようにダメージを受けた。

デイエンド「G4-?は、戦闘予想力をなくし、攻撃に特化したライダーなんだ。」

それって、ただのためだめな攻撃馬鹿？

デイケイド「それなら・・・。」

「アタックライド ギガント」

G4-?「めぎゃああ！」

デイエンド「カメンライド G4」

デイエンドはG4を召還した。

すると、G4はG4-?の攻撃を予測し、G4-?ぼこぼこ殴った。  
よ・・・よわあああああ！

アギト「はあああああああ！」

そして、アギトのライダーキックが決まった。

すると、G4-?は破壊された。

跡形もなく消えていた。

俺たちは、それで終わっていたと思ったが、違った。

なんと、目の前にはアポロガイストがいた

アポロガイスト「今日はこの怪人たちをお見舞いしてやる・・・パ  
ーフェクトサイボーグレベル4の4体獣！」

4にかけたいって気持ちがよく分かる。

ディフォース「はあ！」

ディケイド「てやあ！」

ディエンド「へっ！ほっ！はあ！」

アギト「せえ！はあ！てやああ！」

俺たちは、怪人たちと戦っていた。

ディフォース「これで決める！」

「ファイナルアタックライド デイデイディフォース ジジジ

G5

「アタックライド アドベント」

ドラグフォースの炎の力で敵たちにぐんぐんと近づいていく。

ディフォース「三位一体！ガンバライドシュート！」

灼熱の炎が5体（アポロガイストを含む）を包む。

そして、爆破した。

ケンタ「それで、マコト。俺と一緒に旅するか？」

マコト「いいよ。俺はここで平和を守る。」

ケンタ「そっか……。」

ガラガラガラガラ……。

また絵が変わった。

今度は、赤と黒のライダーの指が一つ、空を指している絵だ。

総司「俺は未来をつかんでいる……！」

ケンタ「カブトの世界……！」

あれは絶対カブトの世界だ。

でも、なぜここにレイが……。

レイ「お久しぶりですう、ケンタ様。」

よりによって、こんな路地で……。

俺の右腕を抱いて歩くレイ。

誰か、知っている人に見られたらからかわれるぞ……。

でも、離せないだろうな。

すると、目の前に、ワームに遭遇している人を見た。

ワーム「ギワラカカカカツカ！」

人「ぎゃあああああああああ！」

ケンタ「レイ、行くぞ。」

レイ「もちろんですわ。変身！」

ケンタ「へんし……って、ワームは？」

俺がディフォーライターをつけたときには、ワームはいなくなっていた。

レイ「どこにいったんでしょうね？」

俺とレイはあたりを見回した。

亜由美「……。ここにケンタ、来てるかな？」

そんなことを言いながら私は歩いていた。

だって、ケンタとのあのときの熱唱は面白かったもん。

ますます気になっちゃうね。

そんなことを思っていると、目の前には、ケンタがいた。

その右側には、ケンタの手を抱いている少女がいた。

あれは……神崎レイ……！！

なんなの？あいつ。

まさか・・・！

レイ「もう放さないですよ？」

ケンタ「ちよっと、それ困るんだけどさ・・・って、え・・・？亜由美？」

ケンタは私のことに気づいたらしい。

亜由美「ケンタ、なんでそんなことしてるの？」

笑顔からキレるのが私のやり方だから、そのままやっっていくことにしよう。

ケンタ「いや・・・これは・・・その・・・」

案の定、パニックった。

亜由美「この、うわきももの〜！」

私の怒りは爆発した。

ケンタ「ちよ・・・え・・・？」

俺は襲われるのかと思いきや、レイのほうに襲い掛かった。

レイ「ちよっと・・・どういことですか？」

亜由美「とっとと終わらせる・・・変身！」

レイ「仮面ライダーなんですか・・・変身！」

「クロノスフォーム」

ライダー同士の戦いになっていたのだ。

キヴァイア「タツロツト！」

キヴァイアがそう叫ぶと、タツロツトが出てきた。

タツロツト「made mo is selle! emperor form ,

change!

キヴァイア「この力を超えられるかしら？」

キヴァイアはエンペラーフォームとなった。

クロノス「そう来るのね！」

クロノスは、ケータロスを取り出して、ボタンを押した。

しかし、電王とは違う音声だ。

「1・2・3・FULLMODE ライナーフォーム」

そう音声を鳴らした後、クロノスはライナーフォームになった。

クロノス「超えてみせる！」

キヴァイア「やってみなさい！」

クロノス「一気に決める！」

「フルチャージ」

タツロット「ウェイクアップ！ファイバー！」

クロノス「超電車切り！」

キヴァイア「エンペラームーンブレイク！」

ドオオオオン！

少し大きな爆発が起こる。

クロノス「キヴァイア・・・強い・・・」

クロノスは、その場で変身解除された。

キヴァイア「勝ちました〜！ね、ケンタ様〜。あんなやつほつとい  
て行きましょ〜って、ケンタ様？」

こんな戦い、無駄だと思い、俺は逃げていた。

レイ「こんなところにいましたか・・・ケンタ様〜？」

ケンタ「俺に触れるな。」

レイが俺の右腕を抱こうとしたところで俺は止めた。

レイ「どうしたんですか？私、勝ちました。」

ケンタ「この悪魔が！何のつもりだよ！人を傷つけてまで俺が欲しいか！」

レイ「どうしてそんなこと・・・。」

ケンタ「そんなレイが嫌いだからだよ！」

俺は、走っていった。

カプトの世界、どうなってるやがる・・・って、あれはワーム？

目の前にワームがいた。

ケンタ「いっちょやってやる！変身！」

「カメンライド デイフォース」

ディフォース「うおおおおお！」

俺は、ワームを剣で斬った。

すると、ワームは痛がるように倒れた。

そして、緑の爆発が起こった。

そこになにか、赤いものが来た。

それは、カブトだった。

カブト「お前、まだこんな世界をうろついていたのか？」

ディフォース「カブトか・・・相手になってやる！」

??「せいぜい楽しみなさい・・・フフフ・・・。」

亜由美「誰・・・って、あなたは・・・！」

「アタックライド インビジブル」

「アタックライド イリユージョン」

ディフォース「いくら、クロックアップした君でも、見つけれなかったら負けだな！」

カブト「そんなもの、大体分かる！」

「1・2・3・ライダーキック」

カブト「そこか？」

ディフォース「ぐわあ！」

俺のインビジブル効果とイリユージョン効果が見事に消え去った。

ディフォース「クロックアップに対抗できるカードってあんのかな・

・？」

そう思い、俺はライドブッカーを探していると、面白いカードが出てきた。

ディフォース「これいいな！」

「アタックライド クロックアップ」

ディフォース「へへへ、カブト！面白い戦いの始まりだ！」

カブト「望むところだ。」

バキ、ゴン！

俺とカブトは、蹴りあい、殴り合い、戦っていた。

そんな途中に、俺とカブトの間に、水色のイナズマが走った。

デIFOォース「なんだ？」

「クロツクアップ」

突然、そんな電子音が聞えると、黄色いライダーが姿をあらわした。

2本の角があるから、クワガタをモチーフにしているのだろうか？

????? 「もしかして、その声、桜坂くん？」

そして、そのライダーは俺のことを知っているのだろうか？

デIFOォース「誰だ？お前。」

????? 「私だよ？双海ミュだよ？」

双海ミュ 通称フタミュ。

またまた俺に関係する小学生じゃねえか。

いったい、どうなってるんだろ。

そう思うのもつかの間、フタミュは俺に抱きついてきた。

これって、いつしかのレイの。

そこで俺は気絶状態へとなってしまうたのだ。

土「おい、ケンタ。大丈夫か？」

俺の目の前には、土と 加賀美新がいた。

なぜ、ガタツクがここに？

新「よかった。ZECTつちの最新ライダーが暴走してね。」

あれが！

じゃあ、あの黄色いのが最新ライダー？

新「あ、言っとくの忘れたけど、あのライダー”ギラファ”って言

うんだ。ギラファノコギリクワガタっていう、最強のクワガタをモ

チーフにしてあるからだよ。」

ケンタ「ふうん……。」

ピロロロロロロロロ……。

突然、加賀美のケータイがなった。

新「え？天道？なに？ギラファがサソードを？分かった、すぐ行く。士、行くぞ。」

士「ああ。」

何かあつたらしい。

そこで、俺はこういった。

ケンタ「俺も行つていいか？」

士「無茶するなよ！」

ケンタ「ああ。」

サソード「ナンノツモリダ？」

ギラファ「死ぬ。」

「1・2・3・ライダースラッシュ」

ギラファは水色にビチビチと輝く剣でサソードを切り裂いた。

サソード「うわあああああああ？」

ギラファ「こんなもんかしら。」

新「ギラファ、これ以上、ライダーを倒すのはやめろ！」

ギラファ「加賀美さんですか……。死ぬ。」

「クロックアップ」

ギラファが襲い掛かってきた。

新「……………！」

そのとき、赤い影がギラファの攻撃を止めた。

ケンタ「カブトか？」

カブト「おばあちゃんが言っていた……。汁の味は見ただけで

は分からない……。」

ギラファ「なんですって……。」

カブト「つまりだ、お前はワームだろ？」

ギラファ「フッフ……。フッフ……。フハハハハハ！私はワーム

ではない。しかし、私は……！」

突然、ギラファの体が赤くなり、どこか見覚えのある姿になった。

アポロガイストだ。  
アポロガイスト「フハハハハハハハハ！私の力を見せてやる！」  
「クライス・イリユージョン」  
アポロガイストはメダル力で、3体のクライス要塞を召還した。  
アポロガイスト「このクライス要塞とどう戦うのか・・・楽しみだ。」  
「  
そっぴいながら、アポロガイストは消えていった。

ミュ「亜由美ちゃん、レイちゃん、行くよ？」  
亜由美「そっこなくつちゃ！」  
レイ「いきますわよ？」  
ミュ「変身！」  
亜由美「変身！」  
レイ「変身！」  
「ヘンシン・チェンジ・スタッグ・ビートル」  
「クロノスフォーム」  
ギラファ「行くよ？」  
クロノス「もちろん！」  
キヴァイア「あの人待っていますもの。」  
3人は、ライナーに乗り込んだ。  
その背後から龍が忍び寄っていた。

「アタックライド マシントルネイダー」  
デIFOォース「はあああああ！」  
俺は、アギトに変身した後、マシントルネイダー・スライダーモードでクライス要塞に立ち向かった。  
「ファイナルアタックライド アアアアギト」  
デIFOォース「ライダーアアアアアアアアアアブレイク！」  
俺は、クライス要塞に向かってライダーブレイクを決めた。  
ドオオオオオオン！

爆発が起こる。

デIFOォース「でも、後2体いるからな……。」「

カプト「はあ！へえ！ふう！」

デイケイド「てやあああああ！」

ガタツク「とりやあ！」

カプトたちは、地上にいる、ギラファ・ワームと戦っていた。

デIFOォース「おおっと・あぶねえ！って、またかよ！って、

あれ、亜由美のライナーじゃん。」

クロノス「そ〜だよ〜！ケンタ！」

そして、クロノスがそういう風に俺に向かって言った。

デIFOォース「じゃ、お決まりのあれを発動！」

「ファイナルフォームライド　ククククロノス　キキキヴァイア」

俺は、2本の剣を持ち、クロノス要塞（2体目）に向かった。

ギラファ「2人と、どこいったんだろ？」

「ファイナルアタックライド　ククククロノス　キキキヴァイア」

デIFOォース「はあああああああああああ！」

鋼の剣と炎の剣を持って俺は、クライス要塞を切り裂いた。

デIFOォース「やったぜ！」

「ファイナルアタックライド　デイデイデイデイケイド」

「1・2・3・ライダーキック」

「1・2・3・ライダーキック」

デイケイド「てやあああ！」

カプト「！」

ガタツク「ゼヤアアアアア！」

ドオオオオオオン！

ギラファ・ワームは一掃された。

デIFOォース「次は、フタミュの番かな？」

「ファイナルフォームライド ギギギギラファ」

ギラファ「あああゝ！」

ギラファは、嫌がるようにファイナルフォームライドされた。

ギラファ「この姿は？」

そのギラファの姿はクウガゴウラムのようだった。

デIFOォース「乗らせてもらうぜ？」

「ファイナルアタックライド ギギギギラファ」

デIFOォース「はあああああああああああ！」

しびれるイナズマのはさみと、燃える烈火の足が、クライス要塞を全滅させた。

で、ここは公園。

亜由美とフタミュはどっか行ってしまったが。

レイだけは俺の傍にいた。

レイ「あの・・・ケンタ様？」

ケンタ「なに？」

レイ「。。。」

レイは俺の頬にちょこんと口を触れさせた。

ケンタ「へ？今のって・・・」

レイ「そういうことです。」

ケンタ「で、それが」

レイ「一つだけ、お願いがあります。ずっと私の傍にいてくださいね？」

レイはそういい、また俺の腕を抱いた。

すると、後ろから変な音が聞えた。

人が悲鳴を上げる音。

そして、砂が落ちるような音。

ケンタ「こんどこそ、ファイズの世界か？レイ、行くぞ！」  
レイ「待ってください！」  
俺とレイは、世界の壁へ飛び込んだ。

そこにはオルフェノクの集団がいた。

右からスネイル、オックス、センチピード、クロコダイル（剛強態）、カクタスだ。

どれも、なかなか強いオルフェノクたちだ。

ケンタ「レイ、行くぞ！変身！」

レイ「分かりましたわ。変身！」

「カメンライド デイフォース」

デイフォース「トリヤア！」

まずは、面倒なクロコダイルに襲い掛かった。

クロコダイルはカイザを2回倒したほどの力を持つ、ラッキークロバーのオルフェノクだ。

デイフォース「さすがにこれで、やられるわけないか。」

「カメンライド カブト」

デイフォース「でも、これにはついてこれないんじゃないのか？」

「アタックライド クロツクアップ」

俺は、クロツクアップの状態となった。

デイフォース「てやあ！」

「ファイナルアタックライド カカカカブト」

俺は、クロコダイルにライダーキックをかまし、クロツクアップ解除となった。

しかし、予想は甘かった。

まったく食らっていないのだ。

デイフォース「嘘だろお？」

クロコダイル「ウガア！」

デイフォース「ああああああ！」

俺は、クロコダイルのファイキールス・ホーンで弾き飛ばされた。

デイフォース「ならば、これだ！」

「アタックライド 音撃舞紅」

ディフォース「レイ、これで2人で歌歌うぞ！」

キヴァイア「分かりました〜！」

（作者注：今から、地の文に歌詞を書いています）

もう 終わらないとき

止まる 時知らない

二人で一つ

ライダーさ

旅立つときは

今さ

もうどんなあんなそんなことがあっても絶対絶対あきらめないその鼓動君感じてるか？

もうどんなあんなそんなことが会っても君の手を放さない、それだけを信じて生きていく

止まらない 愛

刺激される 心

二つの愛は一つになって

君は僕のものなんだ

R I D E . O N !

止まらない時

1 . 2 . G O !

その手に感じる未来

光信じて

W a h t a h y o u G O !

歌い終わった。

スネイル、オックス、カクタスは灰になって消えていった。

しかし、センチピードとクロコダイルはまだ生きている様子だ。

さすが、ラッキークローバー！

そう言いたい、なんか嫌だ。

そのとき、クロコダイルとセンチピードが、一瞬のうちに灰になつて消えた。

ダメージが命の炎を消すまで時間がかつたのだろう。

しかし、その予想は外れていた。

「タイム・オーバー」

そこには、ファイズともう一人、ファイズのようなピンクのライダーがいた。

デIFOォース「ファイズと・・・誰だ？」

ファイズ「どけ、俺が歩く道だ。」

????「私も通らせてよね。」

デIFOォース「俺と戦え！」

「ドライバージェンジ デIFOォース ライジング」

ファイズ「いいだろう。行くぜ?777(セブンス)。」

777と呼ばれるライダーはそう答えた。

777「倒すんだからね！」

「ファイナルライド キャツスルドラン」

俺は、キャツスルドランを召還した。

キヴァイア「タツロット！」

キヴァイアがそう叫ぶと、タツロットが出てきた。

タツロット「made moiselle!emperorform,

changee!

キヴァイアはエンペラーフォームとなった。

「ファイナルカメンライド キバ」

俺もエンペラーフォームになった。

デIFOォース「行くぜ?」

ファイズ「かかってこい。」

777「相手になつてやつてもいいわよ。」

キヴァイア「うっとうしいのでやりますわよ。」

そうやって、俺たちの戦いが始まった。

「フフフ「巧、行くよ?」

「エクシードチャージ」

「ファイズ「ああ。」

「エクシードチャージ」

「デIFOォース「こつちもやばいぜ。いくぜ、レイ。」

「キVァイア「はい。ケンタ様〜!」

「ファイナルアタックライド デイデイデイIFOォース」

「タツロット「ウェイクアツプ!フイーバー!」

「フフフ「はあああああ!」

「キVァイア「はあああああ!」

「ファイズ「てやああああ!」

「デIFOォース「うりやああああ!」

「フフフとキVァイア、ファイズと俺がぶつかる。

「ファイズ「ぐわああ!」

「キVァイア「やああ。。。」

俺は、落ちていったキVァイアのほうへ、駆けていった。

「デIFOォース「レイ!レイ!」

「キVァイアは変身解除され、レイになっていた。

「レイ「ケンタ様・・・後はお願いします・・・。」

「バタリ。」

「そして倒れてしまった。」

「デIFOォース「フフフ!お前から片付ける!」

「俺はセブンスのほうを指差した。」

「フフフ「ちよつと、タンマ!もしかして、君、桜坂ケンタ?」

「デIFOォース「今ごろ気づいてなんだけど・・・マリナ?」

「二人とも変身解除した。」

「そこには、幼馴染の澤田マリナがいた。」

「ケンタ「やっぱりマリナか。」

マリナ「そうよ。ってか、何で神崎というわけ？」

ケンタ「しょうがねえだろ？こつちも仲間がいたほうが都合だし、何よりお互いいたほうが嬉しいんだよ。」

マリナ「なんですって……。」

マリナは怒り出した。

そりゃ怒るのも無理ないよな……。

俺とマリナの記憶はほかの人の記憶とは違う特別なオーラを持つものなのだ。

あれは、俺が5年のころ、自然学校（学校によれば林間学校とかいうあれ。）に行ったときだった。

マリナ「ねえ、ケンタ。あそこの山、登ろうよ〜!!」

マリナは、はしゃぐ。

林間学校の俺の班は、俺とマリナと亜由美とあと、青空コウジという友達で構成されていた。

ちなみに俺が班長である。

ケンタ「コウジと亜由美はどう思う？」

コウジ「そうだなあ〜。山は登りたいんだけどな、え〜とな……そ〜だ！二組に分かれるってのはどうかな〜？」

実はこの案は、マリナの気分をよくするためにコウジが合えて練ったものだった。

マリナ「じゃあじゃあ〜！私はケンタと〜!!」

マリナは俺の腕に抱きつく。

ケンタ「まだ決まったわけじゃないんだから……。亜由美はこれについてどう思う？」

亜由美「そうね……。まあ、それでいいんじゃない？じゃ、私ケンタと〜!!」

亜由美も負けてはいられなかった。

マリナ「じゃあ、亜由美ちゃんはコウジ君と行けばいいじゃない〜!!」

亜由美「私の意見は却下？ふざけるんじゃないわよ！」

そして、3分ほどケンカは続いた。

止めたのは俺だった。

ケンタ「じゃあ、俺はコウジと行くから、そこは二人で！」

俺はそういいきつたが、コウジは、

コウジ「俺は一人で行く。君らは3人でいくといい。」

突然コウジがそんなことを言い出した。

ケンタ「ちょっ、それあぶねえだろ！亜由美かマリナを選んでいけ。」

コウジ「じゃあ、亜由美。」

コウジは亜由美を選んだのだった。

ケンタ「じゃ、これで出発〜！」

そして、この自然学校は4泊5日である。

その4日目の夕方。

海で遊ぶ計画があった。

その時。

やたら露出の多い水着（節約ですか？）を着ていたマリナと亜由美

は俺に飛びついてくるわ、亜由美が沈むわ、散々だった。

そして、コウジは亜由美の様子をうかがいにいった。（先生に拒否

されかけたが何とか押し切った。実はこれもマリナのため。）

そのため俺とマリナは二人きりになってしまった。

そして、海岸の端で。

マリナ「ねえ、ケンタ。夕日、赤いね。」

ケンタ「そうだけど？」

マリナ「ちよつといい・・・？」

マリナはケンタの頬に唇をちょこんと触れさせた。

ケンタ「ちょっ・・・マリナ・・・一体何を・・・？」

マリナ「好きだよ。」

こんな記憶があったのだが。

104

これを読めば俺とマリナがどういう感じだったか分かるだろう。

マリナ「今は、レイちゃんと一緒にいるのか？昔は私だったのに。」

そんな感じに、遠い場所を見る目で言ったマリナ。

ケンタ「？」

巧「ウワオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

突然、巧が吼えていた。

ケンタ「変身！」

「カメンライド デイフォース」

巧はウルフォルフェノクになっていた。

デイフォース「狼には狼だ！」

「フォームライド キバ ガルル」

デイフォース「かかって来い！」

士「なんだ・・・ここ・・・」

夏海「空気がネガの世界みたいです・・・」

ユウスケ「あれ・・・全員オルフェノク・・・！」

士「ここはオルフェノクが世界を支配する世界か・・・」

士はギターを背負っていた。

士「試しに弾いてみるか。」

ポロロロロロン・・・。

士のギターの音色はこの世界を明るく包んでいた。

この世界は、ファイズの世界。またの名を、パラダイス・ロストの世界。

デイフォース「ウワウホオオン！」

「ファイナルアタックライド キキキキバ」

俺は、剣をキバで噛み締め、ウルフを切った。

ウルフ「ウガアアアアア！」

ウルフは巧へと戻っていった。

デイフォース「よかった……。」

俺は変身解除した。

ケンタ「で……レイ、どこ？」

さっき、レイは倒れていたのだが、どこに行ったのだろう。

すると、俺の目の前でマリナと会話してた。

レイ「死んでください……。ケンタ様に触れる意地汚い女どもはすべて……。」

マリナ「ふざけないで！何がケンタ様？どういうプレイされたか知らないけど？私は認めないんだからね！」

ケンタ「やってらんね〜。」

俺はすたすたと歩いていった。

ケンタ「あれ、土。」

目の前にはギターを弾いている土の姿があった。

土「この世界はファイズの世界。どこを見渡してもオルフェノク。

これはどういうことだ？」

まさか、あの映画と同じ……。

ケンタ「多分、パラダイスロストだと思う。」

土「パラダイスロストって何だ？」

ケンタ「簡単に言うと、オルフェノクが人間を支配したことをいう。」

土「要するに、ネガの世界のオルフェノク版だと思えばいいのだな？」

ケンタ「そういうことだ。」

キヴァイア「許せないのはそっちよー！」

777「行きますよ？」

キヴァイア「はあ！」  
777「へえ！ほお！」  
「ウェイクアップ！これで決めるよ〜？」  
「エクシードチャージ」  
キヴァイア「はあああああ！」  
777「てやあああああ！」  
二つの爆発が起こった。

士「二人のライダーが戦った？」  
ケンタ「第2次龍の子争奪戦か！俺のためになんで……！」  
俺は駆けていった。  
ケンタ「こんなことはやめろ！」  
キヴァイア「ケンタ様？」  
777「ケンタ。。」  
ケンタ「俺のために誰かが傷つくのは見たくない！もう、やめろ！」  
キヴァイア「分かりましたわ……。。」  
キヴァイアはおとなしく変身解除した。  
しかし 777は変身解除をしなかった。  
ケンタ「777。お前なんかおかしいぞ。」  
777「私は守りたいもののためなら命を賭けるって決めたのよ。」  
ケンタ「だから、キヴァイアと戦ったのか？」  
777「そうなのよ！」  
ケンタ「人が傷ついて 平気なのかよ？」  
777「平気なのよ！もう知らない！」  
777は走っていった。  
ケンタ「何で俺のためなんか……。。」  
俺は別方向に走っていった。

3分ほど走っていると、アカギがいた。  
アカギ「すぐ傍にデイケイドがいたのに、なぜ抹殺しなかった？」

ケンタ「またそのことか？お前が選んだ仮面ライダーたちはな！みなディケイドを尊敬していたり敵対意思がなかったりするんだよ！」  
アカギ「それで本当に世界は救えると思うのか？」  
ケンタ「アカギ、お前は一度考えを捨てる。そして、俺のところに来い！」

アカギ「そうか。なら、2つ目の用件を言おう。」

ケンタ「二つ目？」

アカギ「このものがお前に会いたがっていた。ではまた会おう。」  
アカギの言っていた「このもの」とは、亜由美のことだった。

亜由美「ケンタ・・・ねえ、願い、聞いてくれる？」

なんかイヤ々な予感がするのは気のせいですか？

ケンタ「なんだ？」

とりあえず聞いてみることにした。

すると、亜由美は俺に抱きつきこういった。

亜由美「ずっと 私の傍に いてね？」

案の定、それ系の言葉だった。

ケンタ「亜由美がライダーでいる限り、ライダーである俺とつながっている。ライダー、みなそうだ。だから、ライダーという立場から逃げたら俺はお前から逃げる！ただそれだけだ。」

そういうと突然、体が街のほうへと動いていった。

亜由美「ちよっと、ケンタ ケンタ！」

それをただ亜由美は呆然と見つめ、そして叫んでいた。

そこには、あのパラダイスロストのBGMが流れていた。  
そう遠くない、未来。

その悪夢のようなメロディが俺の頭をゆがませる。

ケンタ「何のつもりだ・・・オルフェノク・・・」

俺がそういった瞬間、周りにいた人がすべてオルフェノク化した。  
ケンタ「変身！」



オーガ「お前を倒す。」

人々は逃げ待とう。

デIFOオース「くたばれ！オルフェノクどもが！」

あ　　今気づいたけど、俺らのやってること怪人と変わりないよな？

????「本当の敵はスマートブレインにいるオルフェノクだけだ！」

王蛇「お前は・・・カイザ！」

カイザ「当たり前。」

そこにはカイザがいた。

そして、ここはスマートブレインの競技場。

ファイズ「はあ！」

オーガ「うがあ！」

ファイズとオーガがぶつかりあう。

そこに、サイドバッシャーが乱入し、オーガを襲った。

カイザ「乾、遅くなっただな！」

ファイズ「行こうか！」

その後ろからジェノサイダー、ドラグフォース、茜鷹が次々とやってきた。

G5「俺たちもいるぜ！」

デIFOオース「READY、GO！」

俺たち5人とオーガとの戦いとなった。

オーガは、12人の仮面ライダーに対するドラスと同じぐらいがんばって戦っている。

????「そろそろ私の出番ね・・・。」

「7・7・7・スタンディングバイ」

????「変身！」

「コンプリート」

「フフフ「はあああああ！」

突然、オーガに切りかかってきたのはフフフだった。

「デIFOォース「フフフ？何でここに……。」

「フフフ「いいじゃない。別に。」

「デIFOォース「この新カード、使ってやる！」

「ファイナルフォームライド セセセフフフ ファァァァァァイ

ズ ジジジG5」

「フフフ、ファイズ、そしてG5までもファイナルフォームライドさせた。

「デIFOォース「行くぜ！」

「フフフのファイナルフォームライド後の姿はオートバジンのようだった。

「デIFOォース「乗るぜ？」

「フフフ「もちろんいいわよお。」

「そういい、フフフは走り出した。

「そして、オーガに向かって突進した。

「オーガ「ぐわあああああ！」

「王蛇「はあ！」

「威吹鬼「てやあ！」

「王蛇と威吹鬼のブラスター攻撃がきまった。

「「ファイナルアタックライド デイデイデイデIFOォース セセセフフフ」

「デIFOォース「行くぜ！3身一体！フフフトルネード！」

「背後からのドラグフォォースの応援で、烈火のトルネードをオーガに決めた。

「オーガ「ぐわああああああああ！」

「そして、オーガはこの世界から消えていった。

「カイトたちはみなどこかの世界へと散らばっていった。

「ケンタ「 きつと、次が、最後の世界だ。」

そついい、写真真館にある、あの鎖を引いた。

そこには、古代文字の描かれた絵があつた。

ユウスケ「これつて 俺の世界？」

ケンタ「ユウスケはユウスケでも、五代雄介のクウガの世界。だからユウスケ、この世界ではここから一步も動くなよ。」

ユウスケ「なんで？」

ケンタ「ユウスケと雄介がまぎらわしいから。」

そついつて、ドアを開け、新たなる世界へと走り出した。

Episode「KUUGA」・終末

クウガ「はあ！」

ディフォース「とりやあ！」

テレビにはクウガとディフォースの姿が映し出されている。

それを見て、アナウンサーは喋る。

アナウンサー「現在、未確認生命体4号と未確認生命体100号が力をあわせ、未確認生命体99号と戦っています！」

士「ふ〜ん。ケンタのやつもなかなかやるじゃないか。」

ユウスケ「何で俺は出て行ったらいけないんだろうね。」

士「神様が同じような人物を二つ出すと困るからじゃないか？」

ユウスケ「ぜんぜん意味わかんね〜ぞ！」

夏海「要するに、同じクウガを同じ世界で戦わせると世界がおかしくなるとか、そういうことかもしれないよ？」

そう、テレビに映っていたのは、五代雄介が変身していたクウガである。

????????「はあ！」

突然、グロンギが銃に撃たれた。

アナウンサー「ここで、未確認生命体97号が出現しました！」

ディフォース「なんだ？お前。」

????????「僕は、ディヴォルバー。仮面ライダーディヴォルバーさ。」

その銃系ライダーはディヴォルバーという。

ディヴォルバー「僕は仮面ライダーディヴォルバー。そして、青空コウジさ！毒牙部隊4番のな！」

ディフォース「行方不明者 最後のか。」

ディヴォルバー「同時攻撃しようか！」

ディフォース「OK！」

「ファイナルアタックライド デイデイデイフォース」  
「ファイナルアタックライド デイデイデイヴォルバー」  
「アタックライド ブラスト」  
グロンギ「ゴグギゴグゲギガ・・・！」  
クウガ「一斉発砲？なら俺も！超変身！」  
クウガはペガサスフォームとなり、ペガサスボウガンを相手のほうに向けた。  
三つの弾がグロンギを直撃した。  
デイフォース「グロンギ弱あ！」  
デイヴォルバー「お前、甘いな。本当の敵を。ユニバースショットを知らんのか？」  
デイフォース「なんだと？」  
俺達は、変身解除した。  
そして、クウガはどこかに行ってしまった。

コウジ「要するに、スーパーショットカの生き残り・・・つまり、アポロガイストの一部が、グリードのメダルパワーにより回復したんだ。アポロガイストが最後に発した言葉が本当になったんだ。」  
ケンタ「なるほど・・・」  
コウジ「それで、NEORIDERSがデイケイドを抹殺するためにつめたライダーや追加装備を身に付けたライダー。つまり俺達だ。そのライダー達をアポロガイストは次々とメダルパワーで破壊していつているのだ。」  
ケンタ「じゃあ、カイトたちも・・・」  
コウジ「カイトもデイケイド抹殺ライダーの一人なのか？」  
ケンタ「ああ。言えば毒牙部隊全員つてところだ。」  
コウジ「まずい！このままでは・・・！」  
ケンタ「ぐ・・・ぐわあああああああ！」  
俺の脳内に突然、悪夢が映し出された。

ここは電王の世界。

クロノス「ネガタロス……。そんなに私を殺したいの……。」

ネガ電王「死ね。」

「フルチャージ」

ネガ電王「ウガアアアアアアア！」

クロノス「きゃあああああああ！」

ここはブレイドの世界。

デイエンド「兄さん、もうやめる！」

グレイブ「終わりだ。」

エッジ「ぐわあああああ！」

グレイブは黒い雷光でエッジを切り裂いたのだ。

デイエンド「刃　　！」

ここはカブトの世界。

キラファ「なんて早いの？」

ダークカブト「追いつけるわけがないさあ……。」

「1・2・3・ライダーキック」

ダークカブト「はあああああああ！」

キラファ「きゃあああああああ！」

ここは、ファイズの世界。

777「もう一人の帝王つて訳ね……。」

サイガ「人間は……。死ねえ！」

777「オーガまで！」

オーガ「人間は殺す。」

777「　　。」

ズヴァアアアアアアア！

ここはアギトの世界。

G5「V1-?だと?」

V1-?という名のライダーがG5を狙撃する。

G5「ギガント!」

V1-?「!」

ドドドドドドド!

ここは龍騎の世界。

王蛇「何のつもりだ!」

リュウガ「貴様の運命はこれで終わりだ。」

「ファイナルベント」

王蛇「ぐわああああ!」

リュウガ「フハハハハハハハ!」

ここは響鬼の世界。

アポロガイスト「終わりだ。」

威吹鬼「くらえ!」

アポロガイスト「無駄だ!」

威吹鬼「ぐおおおおお!」

とてつもない爆風の中、威吹鬼が落下していった。

ここはキバの世界。

ダークキバ「君に天罰を下す。」

サガ「・・・!」

キヴァイア「私が死んだって・・・きっと・・・ケンタ様が・・・あ

なた達を倒す・・・!」

ダークキバ「ならば死ね。」

キヴァイア「ケンタ様・・・後は頼みます・・・。」

そこで、幻影は終わった。

ケンタ「コウジ!」

そこでは、ディヴォルバーとなったコウジがシャドームーンと交戦中だった。

ケンタ「変身！」

「カメンライド デイフォース」

デイフォース「はあ！」

シャドームーン「とんだ邪魔が入った。カオス・・・出よ！」

カオスといわれた俺に似た少年は、黒いライダーで変身した。

「カメンライド カオス」

カオス「君の相手は僕だ！」

デイフォース「かかって来い！」

シャドームーン「シャドーキック！」

ディヴォルバー「ぐわあああああああああああああああ！」

ディヴォルバーは、ただ、ライダーを握りながら倒れた。

デイフォース「貴様・・・！」

「ファイナルアタックライド デイデイデイフォース」

デイフォース「はあああああ！」

俺が蹴ろうとした瞬間、カオスもシャドームーンもどこかの世界へ消えていった。

デイフォース「くそお・・・ってか、コウジ・・・！お前、大丈夫か？」

コウジ「・・・どう見ても大丈夫じゃないと思うけどな？」

デイフォース「コウジ・・・せつかく会えたのに・・・元の世界で

ガンバライドしたかったのに・・・結局これかよ！うっう・・・

・・・死ぬな！死ぬんじゃない！」

コウジ「。」

そこで、コウジの命は絶えてしまった。

デイフォース「コウジイイイイイイイイイイイイイイイイ！」

俺はそう叫んだ。

カオス「闇に栄光あれ！」

アポロガイスト「破壊に栄光あれ！」

ユニバースシヨツカーはそうみなで叫んでいた。

ケンタ「俺に残されたことはただ一つ……。ユニバースシヨツカーとやらを倒すことだ！」

残された時間で　　俺はやれるだけのことはやる。  
それだけだ。

ケンタ「散っていった仲間達の命を背負って　　俺は　　！」

雄介「あ！ケンタ君〜！」

雄介がトライチェイサーで走ってきた。

雄介「これ……この世界の最後の化石だ。何かを意味するんだけど……君が使って。これが、君の運命を変えそうな気がして。」

ケンタ「ありがとうございます！」

俺は、なんとなく路地を歩いていた。

すると、世界の壁からリュウガがやってきた。

でも、このリュウガはどこか違う。

リュウガは……龍騎サバイブのような姿をしている。

要するにリュウガサバイブってことだろう。

リュウガ「お前を倒せば俺は最強のライダーだ！」

ケンタ「お前を倒す気はない！ただ、お前らのアジトまで案内しろ　　！」

リュウガ「いいだろう。行ったところで、お前は死ぬ運命にあるのだが。」

ケンタ「そうか？」

俺とリュウガはユニバースシヨツカーのアジトへと向かった。

リュウガ「アジトについたぞ。さあ、バトルだ。」

いきなりリュウガは殴ってきた。

ケンタ「あつぶねえな！変身！」

「カメンライド デイフォース」

デイフォース「てやああああああ！」

ズヴァヴァヴァーン！

リュウガに俺は猛攻した。

リュウガ「死ね！」

「アドベント」

リュウガはブラックランザーを召還した。

デイフォース「ならば！降臨せよ！」

「アタックライド アドベント」

俺は、ドラグフォースを召還した。

リュウガ「甘いな。」

「フリーズベント」

せっかく召還したドラグフォースは、凍らされてしまった。

デイフォース「なら、2体ごと倒す！」

「ドライバージェンジ デイフォース ライジング」

俺は、ライジングフォームへと変身した。

「ファイナルカメンライド 龍騎」

「ファイナルライド アビス」

今日は運が悪かったのか知らないが、防御力がガクンと下がった。

デイフォース「はああああああ！」

俺は、怒りに燃えている。

いろんな意味で。

その憎しみの拳がリュウガを傷つけてゆく。

リュウガ「ぐ・・・ぐはああああああ！」

「ファイナルアタックライド リュリュリュ龍騎」

デイフォース「行くぜ！ドラグランザー！」

俺は、ドラグランザーに乗り込み、リュウガに攻撃していった。

「ファイナルベント」  
リュウガもファイナルベントを使った。  
2つのランザーが共にぶつかり合い、生き残ったのは俺だった。  
デIFOォース「どうだ！リュウガ・・・。」  
リュウガ「ぐ・・・ぐがああああああ！」  
リュウガは爆風と共に消えていった。

オーガ「ついにリュウガがやられたか。」  
サイガ「It's SHOW TIME！」  
グレイブ「貴様を始末する。」  
ダークカブト「手加減はしない。」  
ネガ電王「死んでもしらねえぞ。」  
ダークキバ「とにかく死ぬ。」  
サガ「・・・！」  
V1「？」「ライダーは殺す。」  
シャドームーン「フフフ・・・終わりだ。」  
カオス「わが下部よ。我に取り込まれよ！」  
カオスがそういった瞬間、ダークライダー達が、カオスと一体化した。

すると、カオスがクウガ・アルティメットフォームのようにアーマーが強く見え、そしてディケイド・激情態のように捻くれた感じになった。  
デIFOォース「かかってこい！」  
カオス「やってやる！」  
ズヴァア！  
ベゴン！  
アジトのいたるところが俺達の怪力で破壊されていく。  
「ファイナルライド モモタロス」  
俺は、モモタロスの効果で攻撃力を上げた。  
「ファイナルライド テディ」

カオスはデディの効果で防御力を上げた。  
どちらも力が互角だ。

「ファイナルライド BLACK」

そして、俺はBLACKの効果でカオスの攻撃力を下げた。  
カオス「そろそろ決める！」

デIFOース「ああ。」

「ファイナルアタックライド デイディデイIFOース」

「ファイナルアタックライド カカカカオス」

カオス「ぐわああああああああ！」

カオスは爆風と共に消えた。

アポロガイスト「カオスがやられてしまったと……。だが、このメダルで復活させてやるわ！」

「アンデット・銀」

アポロガイストはアンデットメダルで、カオスを再びこの世に出現させた。

カオス「今度の僕は一味違う。」

本当にどこが違う。

なんか、デイケイドコンプリートフォームのように、リュウガを含むあの10人のダークライダーがカオスの胸部にカードとして表示されていた。

アポロガイスト「デイケイドのライダーメダルを使ったのだ。」

デIFOース「もう一度あの世に送ってやる！」

アポロガイスト「そういつているが、人数的に完全に不利なのだ！  
貴様に勝ち目はない！」

デIFOース「そうかもしれないねえな……。でもな……。俺が犯した過ちをもう誰もしないために！俺は  
死ぬまで貴様らと戦う！」

クウガ「その通りだ！僕も、守りたいものがある。だから、ずっと夢を追いかけて戦っている！」

そう俺達が言った瞬間、新しいカードが出てきた。その中の一つにケータッチ用のカードがあった。雄介からもらった化石。

この化石　　ケータッチのような形してるな。

俺が、その化石に触れると、その化石に色がついた。赤と黒のケータッチだ。

俺は、その中にカードを入れた。

そして、順番にタッチしていった。

「デイヴォルバー・G5・王蛇・777・エッジ・威吹鬼・ギラフ  
ア・クロノス・キヴァエア・ドライバーチェンジ　デイフォース  
コンプリート」

俺の胸部に散っていったライダー達のカードが浮かぶ。

すると、なんか、自分が一人じゃないって感じがした。

キヴァエア「あの世から舞い戻ってきましたよ？ケンタ様〜。」  
そんなキヴァエアの声が聞えてくるようだ。

王蛇「俺、参上だけ？毒牙部隊・・・集合！ヤイバが入団したぜ？」

王蛇の声も聞えてきた　　って、実際に聞えてる？

でも、どこにも姿はない・・・

クロノス「てか・・・なんで私達、ケンタの体にいるわけ？」

威吹鬼「ケンタが俺達をケータッチで融合させたからじゃねえか？」  
俺達は融合してしまっただのか・・・？

クウガ「あ・・・その化石、自分がもう一度会いたいって思った人  
たちをそれがよみがえらせてくれるみたいですけど。寿命が尽きる  
まで。でも、その人たちは、体の持ち主が変身を解除しない限り一  
心同体のままですけど。」

そういうことか　　！

ギラフ「暑苦しいね〜？変身解除してよ〜！」

777「ケンタと一心同体・・・。。ぽっ。」

エッジ「なんかすごいことになったな〜。」

G5「いえてるぜ。」

デイヴォルバー「ケンタ、決まり文句はあるんじゃないかねえのか？」

デイフォース「そうか・・・ユニバースシヨツカー！俺達はな！10人で一人の仮面ライダーだ！」

ギラファ「なんで？」

デイフォース「文句あつか？」

ギラファ「別にないけど・・・。」

デイフォース「行くぜ　　！」

デイケイド「遅くなつたな！」

デイエンド「僕達も参戦だ！」

W「僕達は二人で一人の仮面ライダーさ。」

「フフフ・ギラファ・クロノス・キヴァア　カメンライド」

俺は、まずガールズライダーを召還した。

デイフォース「音撃舞紅・・・使えよ。」

フフフ「分かりましたわ。」

クロノス「そこの赤い騎士さ〜ん！準備はいいかな？」

ギラファ「私達のコンサート、はじめるよ〜？」

キヴァア「3・2・1・・・START！」

彼女らは「REVOLUTION GIRL」を歌いだした。

（作者注：今から、地の文に歌詞を書いていきます）

譲れない

私のものだから

死んでも

私のものだから

いつでも

私のものだから

あなたは

私のものだから

抱きしめてね？

お願い

心の中で渦巻く思い(憎しみ)

あいつに譲れるもんですか!

恋愛・シチュエーション

一日1回は

したいね?

したいよ?

私がやってみせるわ

君に好きって言って欲しい

君だけ好きに遊んで欲しい

特別よ?

REVOLUTION・GIRL!

彼女らは歌い終えた。

デIFOオース「次は毒牙部隊の歌だ!」

王蛇「このビートを」

威吹鬼「体感しやがれ!」

G5&エツジ「3・・・2・・・1・・・START!」

俺らは「FIVE FANG BEAT」を歌いだした。

(作者注:ここからも、地の文に歌詞を書いていきます)

FANG FANG FANG FANG BEAT

FANG FANG FANG FANG BEAT

ELECTRIC FIGHTERS

轟け 俺らの魂

輝け 俺らの姿

ボロボロでも立ち上がる

勇気!

俺が感じているPOWER

みなぎってくるぜ

君が感じてるLOV SO SWEET



」にデイケイドが取り付き、デイケイドが巨大化した。  
デイケイド「決めるぜ！」

デイフォース「ああ。」

「ファイナルファームライド デイデイデイヴォルバー」  
デイヴォルバー「そっちがその気なら。」

「ファイナルフォームライド デイデイデイフォース」

俺とデイヴォルバーはファイナルフォームライドされた。

俺はケータツチのような形に。

デイヴォルバーはディボルライバー（デイヴォルバーの変身アイテム）のように。

俺はデイケイドのライバーに取り付き、ドライバーチェンジした。

そして、デイヴォルバーはデイケイドの手についた。

デイフォース「行くぜ！」

「ファイナルカメンアタックフォームライド デイデイデイフォース」

俺は、デイヴォルバーで相手を攻撃し、デイヴォルバーを元に戻した。

そして、上空に舞い上がり、カードになったみんなをくぐりぬけ、ジャンボガイストを蹴り飛ばした。

すると、大きな爆風と共に、ジャンボガイストは消えていった。

ケンタ「これで・・・俺の旅は終わった・・・ひとつ目はな。」

カイト「まだ続きがあるのか？」

ケンタ「二つ目は俺の世界での人生だ。」

カイト「そうか・・・。」

ケンタ「じゃ、俺たちの世界に戻るぞ！」

10人のあのライダー達がそろった光写真館。

俺たち10人は一気に鎖を引いた。

すると、今度は銀色のドラグレッダーのような龍の絵が出てきた。

ケンタ「これって、俺たちの世界か？」  
俺は外に出てみた。  
どこをどう見ても俺たちの世界である。

俺たちはそれぞれの方向へと帰っていった。

しかし、俺とレイだけは違った。

レイ「ねえ、ケンタ様……。」

ケンタ「何？レイ。」

レイ「前は、ずっと傍にいてくださいでしたが、次は……好きです。ケンタ様が。」

レイは俺に抱きついた。

これはいつものことだが何か違う。

なんだか、俺も何か言いたくなってきた。

あの気持ちを今ここで。

ケンタ「俺も前々から思ってた。レイ。お前と一緒に戦ってきたこと。ずっと忘れない。旅の途中、隣にレイがいる気がするんだ。俺はレイのことが好き。ずっと傍にいてくれ。」

俺とレイは真正面から　唇を、お互い触れさせた。

ケンタ「レイは　俺のもんだ。誰にも奪わせはしない。」

俺は、レイとこの世界で生きていく。

ずっと。

Episode「GAUL」・見せかけエピソード／卒業決戦

2011年3月23日。

この日がそうだった。

卒業式。

大抵の卒業生は波打つ胸をはずませながら登校するだろう。

まあ、一部しみじみと来るやつもいるが。

カイト「あれ？イブキ。ケンタ遅いよな？」

イブキ「こんな日に何してんだろうな？」

そんな時、コウジがやってきた。

コウジ「よお！あれ？ケンタ来てないの？」

カイト「お前、誘わなかったのか？」

普通、ケンタとコウジは家が近いので一緒に登校するはずなのに。

なぜだろう？

コウジ「俺が誘いに行ったら、”もう行った”ってことだったから。」

イブキ「ふうん……。これは、なんかあるかもな……。」

カイト「イブキが言うことは大体正しいから……。そうかもし

れないな……。」

「

ケンタはどこに行ったのか？

ケンタ「わざわざこんなところに呼び出しといて、なんのようだ？

アカギ。」

俺は、NEORIDERSのアカギに呼び出されていたのだ。

それも、人気のない場所に。

アカギ「考えが変わった……。もうディケイドは倒さない。」

ケンタ「またその話か……。」

アカギは鳴滝のようにディケイドを倒そうとたくらんでいた。

アカギ「そこで、お前の名前を知ってやっと思い出した。お前は・

・改造人間だったな・・・。」

ケンタ「なんだと？」

俺は昭和ライダーのように改造されていたというのか？

ふざけるな！！！！！！

ケンタ「ふざけるな！！！」

思っていたことが自然と言葉に出た。

アカギ「お前の父、タカシは妻を仮面ライダーに殺されたことで、仮面ライダーを恨んでいた。タカシは怒り狂い、ついにディフォー・ス・デイヴォルバー・ディザークのライダーシステムを開発した。」  
ケンタ「ディザークって何だ？」

アカギ「今はうちの社員が使っている忍者ライダーシステム。たしか、デイヴォルバーを鍛えたというレポートを受け取っていたが・・・。」

ケンタ「そういえば、コウジが師匠がどうのこうの言ってたのはそういうことだったのか・・・。でもさ、それと”俺が改造人間だ”って話と何の関係がある？」

アカギ「話を最後まで聞かないからそんな質問をするのだ。いいか、タカシはディフォー・スを特に力を入れて開発していた。タカシはディケイドが世界を破壊する予言を事前に鳴滝から聞いていたから、妻が亡くなる前に残していった子供　つまりお前にディフォー・スライバーを与えた。しかし、ディフォー・スの恐るべき力をお前が耐えられるかが不安だった。だから、肉体強化として、改造実験を行った。そして、試しに変身させ、成功した。しかし、そのころ結成され始めていた大シヨツカーにディフォー・スライバーを盗まれてしまった。タカシは大シヨツカーの首領がディケイドだと分かっていたため、タカシはディザークに変身し、ディケイドと戦った。そして、ディフォー・スライバーは大シヨツカーの手から離れたが、どこかの世界に消えていってしまった。シヨツクで油断していたタカシはディケイドに倒された。それを、今になってお前が拾った。そういうことだ。」

俺は、アカギの話が信じられなかった。

アカギ「そして、お前にその真実を伝えたところで、もう一度変身してもらおうか！」

ケンタ「どういうことだ！！！！」

なんだ？この皮膚は？

何でこんな色しているんだ？

まるで

シンじゃないか！

その通りだった。

俺は、シンのようなサイボーグソルジャーと化していた。

アカギ「これぞすばらしい！サイボーグソルジャーアアアアア！フハハハハハハハハ！」

騙されたっていうのか！

俺は、アカギに襲い掛かったが、その瞬間、吹っ飛ばされた。

アカギ「無駄だ！俺を覆っているオーラは邪魔者を吹き飛ばせるほどの力があるんだよ！」

ケンタ「ウガアアアアアアアアア！」

アカギ「唸っても無駄だ！！！！俺を倒せるかな。

変

身。」

アカギは仮面ライダーオーディンとなった。

先生「今日は、桜坂君が欠席しておりますが、それでも、みんないい思い出になるようにしましょう。」

カイト「先生！いい思い出になるかよ！」

先生「

？」

カイトはケンタのいない卒業式を悔しく思っていたのだ。

イブキ「物足りないんだよ・・・ケンタがいなくてよ！」

先生「でもしょうがないんじゃないですか・・・。」

イブキ「まあ、そこまでキレる必要もないか・・・。」

カイト「おい、どういうことさ！」  
イブキ「あいつ、修学旅行の時だって、自然学校の時だっていつも  
集合時刻ぎりぎりになってやってくるじゃないか……。」  
カイト「そういわねば……先生、すいませんでした。」  
先生「じゃあ……その物足りない卒業式を乗り越えましょう……。」  
カイトら卒業生は体育館へと向かった。

ケンタ「ウガアアア！」

オーデイン「そのまま地獄に送ってやる！デイケイドも倒せない小  
僧など！」

ケンタ「ウガアアア！」

俺はウガウガ吼えながら攻撃していた。

オーデイン「なぜそのような無様な姿のまま戦う……。仮面ライ  
ダーよ。」

ケンタ「ウガアアアアア！」

「！」

突然、俺は激しい頭痛に襲われた。

そして、もとの姿に戻った。

ケンタ「はああ……。ここからは本当の力を見せるときだよ……  
……。変身！」

「カメンライド デイフォース」

デイフォース「決着をつけようか！オーデイン！」

司会「同じく4組、青空コウジ。」

卒業証書授与式も終盤に近づいてきた。

この学年は5クラスある。

そして、全体で186人いる。

ちなみにケンタ・カイト・イブキ・コウジ・亜由美・ミュ・レイは  
この4組に所属、マリナは1組、マコトは3組、ヤイバは5組であ

る。

そして、4組が呼ばれたということは、もうそろそろケンタも呼ばれるということだ。

コウジ「はい！」

ディフォース「お前を全力で倒さないと……みんなが待ってるんだよ！」

オーデイン「たかが小さなイベントごときで！」

ディフォース「アンタに見せてやるよ　　心を持った怪物の

力とやらを。」

「ドライバーチェンジ　ディフォース　ライジング」

「ファイナルカメンライド　レジェンド・イレブン・ライダーズ」

オーデイン「なんだと！」

ディフォースの目の前には、ディヴォルバー・G5・王蛇・777・エッジ・威吹鬼・ギラフア・クロノス・キヴァイア・ナスカ・ディザーク・そしてナスカがいた。（本物ではないことはもちろん分かっている。）

ディフォース「みんな、俺に力を！」

「ディヴォルバー・G5・王蛇・777・エッジ・威吹鬼・ギラフア・クロノス・キヴァイア・ナスカ・ディザーク　ドライバーチェンジ　ディフォース　アンリミテッド」

俺は、ライダーたちの力を借りて、アンリミテッドフォームとなった。

ディフォース「ダブルスピナーの力でアンタを倒す！」

ダブルスピナー。

それは、オースのタジャスピナーのようなもので、ディフォース最後の武器である。

タジャスピナーにメダルを入れるように、ダブルスピナーにはカー

ドを差し込む。

そして、お得なことに、ダブルスピナーは両腕についている。

「クウガ・アギト・龍騎・ファイズ・ブレイド・響鬼・カブト・電王・キバ・デイケイド・W・オーズ デイヴォルバー・G5・王蛇・777・エツジ・威吹鬼・ギラファ・クロノス・キヴァイア・デイフォース・ナスカ・デイザーク ギガスキャン」  
両腕の光の力がデイフォースの体全体を輝かせた。

デイフォース「ドラグフォース、ジェノランザー、行くぜ！」

俺は、自分の召還獣とカイトの召還獣の力を借りて、空へ舞い上がった。

すると、ギガスキャンしたライダーのカードが俺からオーディンにかけて出現した。

デイフォース「デイメンション・ファイナル！」

俺は、カードをくぐりぬけオーディンの腹に思いっきりキックした。オーディン「グガガアアア！」

「アドベント」

突然、そんな音声が聞え、オーディンの契約獣、ゴルドフェニックスが俺を攻撃した。

デイフォース「懲りないやつめ！ドラグフォース！追っぞ！」

オーディンがゴルドフェニックスに乗って逃げたので、俺達も追うことにしたのだ。

司会「赤沢侑斗」

侑斗「はい！」

司会「入江相馬」

相馬「はい！」

司会「宇野原龍」

龍「はい！」

司会「小笠原一真」

一真「はい！」

司会「工藤映司」

映司「はい！」

司会「小南渡」

渡「はい！」

次はケンタの番であるが……。

ディフォース「押すぞ！」

ドラグフォースはゴールドフェニックスに巻きついた。

すると、俺達は重量に耐え切れなくなり、地面へと落下していき……。

ふと、下を見ると、そこは俺の学校の体育館

！

司会「桜坂ケンタ」

ディフォース「はい！！！」

ドオオオオオオオン！

俺の返事と共に二人と二匹は体育館へ落下した。

先生「みんな、逃げなさい！」

ディフォース「もう、ここでとどめをさしてやる！」

「ファイナルアタックライド ディディディフォース」

ディフォース「ハアアアアアアアアア！」

「ファイナルベント」

オーディン「！」

黄金の戦士と龍の戦士がぶつかり合った。

体育館一帯に大きな爆発が起こる。

生徒「がんばれ！仮面ライダー！！！」

生徒がそう叫んでいるのが分かった。

亜由美「真の心を持った、仮面ライダー！頑張れ！」

亜由美の声も聞えた。

オーデイン「ぐわああああああ！」

オーデインは倒れ、もとの姿に戻った。

デイフォース「アカギ、俺が改造人間かなんだか知らんが、俺は俺の人生を生きていく！」

俺も変身解除した。

司会「桜坂ケンタ」

ケンタ「はい！」

俺は、念願の卒業証書を受け取った。

無事、卒業式を終えることができた。

そして

ケンタ「なあ、レイ。」

レイ「なんですか？ケンタ様。」

ここは神崎邸である。

ケンタ「俺、あの時、アカギを倒したら何かが抜けていった気がするんだ。」

レイ「？」

レイは何がなんだかわからないようだ。

ケンタ「多分

心の中の野獣だと思っよ

」。

レイ「????？」

レイはさらに訳がわからなくなっていたようだ……別にいいでしょう。

そして、4月。

俺たちは3月までは6年生だった。

そう、4月からは中1だ。

「ライダー部」という部の中で俺たち毒牙部隊は生活している。

そして、再会した仲間が2人いる。

中2の東屋亮真と津上翔万だ。

2人とも「ライダー部」である。

亮真「ライダー部！永遠なり！」

ケンタ「オ　！」

俺たちの新生活はこうして始まったのだ。

そして、自宅。

レイ「お帰りなさい、ケンタ様。」

親を小さいころに亡くした俺は、山吉光さんという人のところで預かってもらっていた。

そこにいた山吉猛さんがライダー好きだったことから、俺もライダーが好きになっていた・・・。

そして、中学生になってから、レイの提案で、レイの財閥「神崎財閥」に引き取られることになった。

そのため、レイと同居になったのだ。

俺としても都合だった。

大好きなレイと一緒にいられるなんて。

レイ「今日も一緒に寝ませんか？」

ケンタ「ん〜。今日もそうしようか。」

同じ部屋で、同じ場所で、ずっと傍にいる。

俺は、こうして二つ目の旅で歩を進めているのだった。  
レイと共に。

これが、俺の人生。

仮面ライダーディフォースの人生なのだ。

## Episode「000」・終わりどけいおんとライダーメダル

ライダー部は本日を持って廃部することになりました。  
訳はわかってる。

カイトやイブキたちが急に野球部やサッカー部に入ってしまったからだ。

部員は俺と亮真と翔万とコウジだけとなった。

部は最低5人いないといけないため、これではダメなのである。

そのため、本日を持って廃部することになった。

部活のない今、俺は帰宅部という特殊な部にいた。

ケンタ「帰宅部イヤ……。」

そんなことをほざきながらとぼとぼ廊下を歩いていた。  
すると、こんな張り紙があった。

「バンド部！ただいま部員募集中！」

バンド部……って、ギターとかそんなんで演奏するけいおんとかいうやつだよな。

確かこの部にはレイ・亜由美のみだった気がする。

俺は、あの時歌ったのを思い出した。

レイ「先生ですか……？って、ケンタ様？なぜここに？そういえば帰宅部っていてましたけど……。何か用ですか？」

亜由美「ケンタ、どうしたの？」

ケンタ「バンド部のメンバー募集の張り紙貼ってたよな？」

亜由美「それが……？」

ケンタ「俺もバンド部入りたいんだが……いいか？レイたちも、あのときの歌覚えてるよな？」

レイ「あの時って……はい。十分覚えております。」

ケンタ「だから、あのときみたいな歌。もう一度歌いたい。演奏だけでもかまわないから、俺をバンド部に入れてくれ！」

俺は土下座した。

亜由美「そこまでしてくれなくていいけど・・・いいよ。」  
ケンタ「ほんとか？」

亜由美「ケンタは大事な友達だもん。」

レイ「そうです。」

ケンタ「ありがとう！」

俺は、バンド部の3人目のメンバーとしてなった。

キヴァイア「では最初の曲です・・・！タイトルは”TRIPLE”です！」

数ヶ月たった今、ライブのときが来た。

場所は特撮商店街。

俺たちはライダーに変身して歌うのだ。

部長であるレイと部員の亜由美と俺。

この3人で今は活動しているのである。

キヴァイア「行きますよー！ケンタ様ー！亜由美さん！」

クロノス「うん！」

ディフォース「おう！」

(作者注：今から、地の文に歌詞を書いていきます)

真っ赤な炎

揺らめく運命

いつかは消える

だから

あの心にもう一度

火を燃やさせて

この道を選んで

今まで歩いてきた

だから

失うわけにはいかない

いつも  
3人にいる  
絶対にいる  
どんなときも  
離れたりしない

THE DESTINY

俺たちは歌い終わった。

すると、当たり前から歓声が舞い込んできた。

キヴァイア「やりましたね〜！」

クロノス「とてもよかったよ〜！」

ディフォース「そうだな！」

ディフォース「なんだ？この音。」

突然、聞きなれない金のような音が聞こえた。

すると、そこには緑色の螳螂のような生命体があった。

コスプレしている人か？

人「ウヴァのコスプレ？」

ウヴァ「ふざけるな！確かに俺はウヴァだ・・・しかし、コスプレではない！」

ここ特撮商店街では、こういうのはコスプレ扱いされるわけである。すごい力を持つていても。

そして、俺たちもコスプレ扱いされているのだ。

ディフォース「そこまでだ！グリード！」

俺は、ライドブツカーでウヴァを切った。

ウヴァ「その程度か？」

ディフォース「だまれ！クワガタ！」

「フォームライド クウガ ドラゴン」

俺は、マイクを、ドラゴンロットにした。

ディフォース「はあ！」

ウヴァ「ぐほお！」

ディフォース「せいやく！」

ウヴァ「ズガアアアア！」

ウヴァの体からセルメダルが噴き出る。

ディフォース「とどめだ！」

「ファイナルアタックライド　クククウガ」

俺は、ドラゴンロッドをペン回しのように回し、ウヴァに当てる。

すると、水のエネルギーが、ウヴァをドバドバ当てる。

ウヴァ「ぐ……ぐはあ……。」

ウヴァの周りにはセルメダルでいっぱいだった。

すると、ウヴァは世界の向こうへと消えていった。

ガメル「ウヴァ？大丈夫？」

ウヴァはもう一つの世界でへたれこんでいた。

メズール「人間の世界に溶け込むっていったって、いきなり適当に特撮商店街に行くの？普通。」

「?????」「とんだ馬鹿だね……。ハハハハ……。」

ウヴァ「ネオ生命体……！貴様あ！　　つ。くそお！」

ウヴァはネオ生命体を倒そうとしたが、急にためらった。

ガメル「ウヴァはあの契約を気にしてるもんね？」

ウヴァ「ネオ生命体……。お前に感謝するしかない……。お前がいなけりや、今ごろオースに倒されていた。」

ネオ生命体「ね？僕すごいでしょ？君の使う昆虫型ヤミーと、僕の使うネオ昆虫怪人を組み合わせれば新たなメダル怪人”ネオヤミー”が生まれるんだよ？欲望の力を最大限に解放してやるよ……。」

「……？どうだい……。契約は外せないでしょ？」

ウヴァ「もう一度聞くんが、本当に人間から大量のセルメダルがもらえるんだよね？」

ネオ生命体「欲望しただけ……普通のものでは100枚は

軽いね……。」

ウヴァ「そりゃあいい……。ぜひともお前との契約は外せないぜ……。」

ウヴァとネオ生命体は愉快に笑った。

そして、ライブはアクション(?)もあり、大好評だった。

その感想の一部を紹介してみよう。

「あのウヴァは演出だったんでしょ？なかなかこってるね。でもさ。カメンライドはあれ、どうやったの？3Dとか使ったりしたの？」

「あのキバみたいな女の子萌え萌えだね。僕の彼女にしたいくらいだよ。」

「あの銀色のライダー・クロノスだっけ。なかなか歌上手いじゃん。」

「あの男の子結構演技が上手い！なかなかだよ！」  
などいろいろあった。

やっぱ俺らコスプレ扱いされてる！

ケンタ「ただいま〜！」

レイ「ただいまです〜！」

あれ だれもない。

ここにいるはずのメイドもレイの家族もない！

レイの住んでる大豪邸はどうなってるんだ〜！

レイ「おかしいですね……。」

俺とレイは自分の部屋(正しく言うと俺とレイの部屋。なぜか一緒の部屋である。)に行ってみる事にした。

すると、その空気はキンと冷ややかでそこには白い怪人がいた。

ケンタ「お前は……ウエザー！」

そこには、ウエザードーパントの姿があった。

ウエザー「これはこれは……仮面ライダーたち。実は今日、神崎

さんの診察の予定がありましたねえ。なかなか来ないので自宅まで迎えに来たのですよ……。」

ウエザーは笑っていた。

レイ「両親やメイドたちはどこなの？」

ケンタ「殺したって言うなよ？」

ウエザー「殺してはいませんよ……。まあ、死ぬ危険性はあるかもしれませんが。地下の倉庫に監禁させただけです。この豪邸の。」

レイ「まあ、いいですね。ケンタ様。行きますよ！変身！」

ケンタ「行くぜ。変身！」

「カモンライド デイフォース」

デイフォース「外でやるうじやないか。」

ウエザー「別にいいですよ……。」

デイフォース「はあああああああ！」

キヴァイア「くらえ！」

キヴァイアは自分の剣”クラウンソード”でウエザーを斬る。

しかし、攻撃は雪のバリアで封じられ、キヴァイアは雷雲の輪に閉じ込められ、雷の攻撃に苦しんでいた。

デイフォース「ちくしょお！」

「フォームライド デイフォース デイフェンシブ」

俺は、防御に特化したデイフェンシブフォームに変身した。

ウエザー「はあ！」

デイフォース「これぐらい！」

俺は、ウエザーに攻撃していった。

しかし、すべてかわされる。

翔万「もうそろそろ行ったほうがいいんじゃない？」

翔万は、亮真に聞く。

亮真「まあ、もうちょっとピンチになってからじゃないの？あそこ  
の銀色が死にかけのところあたりで。」

まったくこいつは……。  
翔万はそう思った。

俺は、ファイズ・アクセルフォームになり、ウエザーに向かっていた。  
「ファイナルアタックライド ファアファファイズ」

翔万「あれ、やばくない……？」  
亮真「まあ、見てよう。」

デIFOォース「うおおおお！」

10秒たったため、通常のデIFOォースに戻った。

ウエザー「そんなもんですか……。馬鹿馬鹿しい。はあ！」

俺も雷雲の輪の攻撃を受け、変身解除されてしまった。

そして、キヴァイアも変身解除されてしまった。

俺たちは、口から血を吐き、その場でただウエザーを見ることしかできなかった。

亮真「チャ　　ンス！行くぜ！コーヒーの用意はいいな  
つて、なに飲んでんだよ！」

翔万「対応してないやつだからいいじゃんか。」

亮真「まあ、いいや。じゃあ、行くぜ！」

2人は駆けていった。

ウエザー「行くのはHEAVEN……。それともHELL……。ど  
つちにしましょうかねえ……。」

亮真「どつちでもねえと思うけどなあ……？」

ウエザー「ガキか……。貴様もこいつらと同じようになりたいで  
すか……？」

そこには、亮真と翔万の姿があった。

ケンタ「先輩！今……危ないですよ？」

翔万「君達が旅に行っていた間、この世界はずっと怪人だらけだったんだ。」

亮真「その話は後々。行くぜ！変……身！」

翔万「変身！」

亮真は昭和ライダーの使うようなベルトを装着し、変身のポーズをとった。

翔万はコーヒー缶をGのように、ベルトにはめ込んだ。

?????。「俺の名は仮面ライダーSPIRIT。」

?????。「俺の名は仮面ライダーBOSS。」

亮真はSPIRIT、翔万はBOSSに変身した。

SPIRIT「行くぜ！」

BOSS「ああ。」

SPIRITはウェザーの攻撃を次々とかわし、頭部に打撃を与える。

BOSSは自分の剣・ビターブレードでウェザーの腹を切り裂く。

ケンタ「すげえ……。」

SPIRIT「ライダーアアアアアアアアキイイイック！」

「ファイナルチャージ」

BOSS「ライダー キック！」

二人のキックがウェザーのとどめを刺した。

レイ「ケンタ様、行きますわよ。」

ケンタ「ああ。」

俺たちは地価倉庫に向かった。

ケンタ「ここなのか？」

レイ「何度か来たことあるので……多分ここです。」

?????。「レイ !そこにいるのか!」

?????。「返事してくれ!」

レイの両親の声が聞える。

レイ「はい〜！ここにいます〜！」

レイがそう叫ぶと、倉庫は明るくなった。

そこには戦闘員がたくさんいた。

戦闘員「イ　！」

戦闘員はイーイー叫びながら俺たちに襲い掛かってくる。

こんなやつらなら、変身しなくても倒せる。

ケンタ「ここは俺に任せろ！レイは行け！」

レイ「分かりました。」

ケンタ「てやあ！せいっ！」

俺は無数の戦闘員を倒す。

そして、すべて倒した。

レイの父親・ヒロシと母親・アキは無事救われた。

ウヴァ「本当にこれでよかったのか？アポロガイスト。」

アポロガイスト「このライダーメダルは無限の可能性を秘めている。

ネオ生命体「その通りだね。」

アポロガイスト「では、再び調達に行つてくるとしよう。」

アポロガイストはどこかへと消えていった。

ケンタ「まさか、先輩達がライダーだったなんて。」

亮真「とんでもない。俺たちはまかされたわけ。NEORIDER

Sに。」

ケンタ「NEORIDERS……。アカギらが……………」

翔万「ケンタ……。お前、どこ行くだ！」

ケンタ「へ？え……。え……。嘘だろおおおおおおお！！

！！」

俺は、気がつくのと、別の世界にいた。

目の前にはファイズとアポロガイストがいた。

ファイズ「仲間を返せ！」

アポロガイスト「どうせ返したところでなんになる。メダルになっているのだぞ！」

ファイズ「気持ちだけでもいいんだよ！」

アポロガイスト「はあ！」

アポロガイストは銃をファイズにめがけ打った。

それは見事ファイズに当たり、ファイズを黒いメダルにした。

まさか、あの銃の力でファイズがメダルに。

アंक「ヤミーの匂いがする……。」

映司「そうなのか？アंक！」

アंक「それも、超大物だ！」

映司「一刻も早く行かないと！」

アंक「ああ。」

二人はクスクスエを出る。

アポロガイスト「次はお前だ。」

デイフォース「やってみろ！」

アポロガイスト「はあああああああ！」

アポロガイストの撃った弾が、デイフォースに接近していた。

「タカ・トラ・チーター」

突然、そんな電子音が聞えた。

すると、ガキン！と、その弾を跳ね返すものがあつた。

そして、目の前にはオーズの姿があつた。

デイフォース「アンタ・・・オーズか。」

アंक「なぜオーズの事を知っている・・・。」

デイフォース「今度は赤グリードのアंकか。訳を言うと、有名だからだよ。」

オース「それにしても、これ、ヤミー？」  
アंक「確かに。こんなメカニカルなやつは見たことねえ。」  
メカニカルなやつとはアポロガイストのことである。  
アポロガイスト「ライダーが二人……。これはいい獲物だ……。  
」  
オース「まあ、とにかくやろう！」  
デIFOオース「ああ。」

俺たちとアポロガイストはどたとたと戦っていた。  
デIFOオース「てりやあ！」  
俺は、剣をアポロガイストに向けた。  
そして、アポロガイストはどこかの世界へ消えていった。

デIFOオース「待てえええええ！」  
俺は、それを追った。

デIFOオース「ここは……。どこだ？」  
ウヴァ「お前は……！」  
デIFOオース「あ、ウヴァ。」  
ウヴァ「気安く呼ぶな！」  
俺はウヴァに引つかかれた。  
アポロガイスト「ここまで来るとは……。メダルにしてや……。いや、こいつは操ったほうがいい……。だから　　はあ……！」  
アポロガイストは、なぜか地の石をもっていた。  
俺は、その力により、意識を失ってしまった。

そして、ここはデIFOオースの世界。  
の、ケンタの通っている中学校。  
デIFOオース「……。……。」。  
生徒A「なんだ？あいつ。」

生徒B「コスプレしてるんじゃないの？」  
そんな声が聞える。

カイト「あれって……ケンタか？」

生徒A「ケンタって……桜坂ケンタのことか？」

カイト「ああ……。あいつ、コスプレが趣味じゃないはずだが……。」

「アタックライド ブラスト」

ディフォースは銃弾を撃ち散らす。

カイト「もう我慢できねえ！変身！」

俺は、変身を遂げた。

ちょうど登校したところだったので、ディフォースは近くにいたのだ。

王蛇「はあああああああああああ！」

ディフォース「……。」

ドガッ！

俺は、飛び掛ったが、ディフォースのパンチで跳ね返された。

「アタックライド アドベント」

ディフォースはドラグフォースを召還し、俺に攻撃してきた。

王蛇「さつきからどうもおかしいと思ったが……。まさか、ケンタが操られていたなんて……。だが、お前らもここで終わりで。この学校にはライダーがうじゃうじゃいるんだからよ！出て来い！」

SPIRIT「ほんとに、その通りだよ。」

BOSS「まったく。」

キヴァイア「そろそろとどめ的时候了よ。」

クロノス「いくよ！」

威吹鬼「まあ、仲間が危険だったんだ。やってやるよ。」

エッジ「オンドウルルラギッタンディスクー！」

俺たちには仲間がいる。

だから、ケンタを止められる。

俺は、デッキからカードを引いた。

そのカードは、「ユナイトサバイブ」と書かれていた。

王蛇「まあ、やってみるか……。」

「ユナイトサバイブ」

そう電子音がなると、俺の倒したガイとライアの体の一部が体に現れた。

右腕にはウィップを、左腕にはホーンが装着されていた。

王蛇「はあああああああ！」

ドガン！ズガン！

俺は、デイフォースをズガズガ攻撃する。

「ファイナルベント」

「フルチャージ」

「ウェイクア〜ツプ！いつくよお〜？」

クロノス「はあ！」

威吹鬼「そらあ！」

キヴァイア「えい！」

SPIRIT「ライダーアアアアアアツキイイイイック！」

B O S S「ライダーキック　　！」

王蛇「HELL　　STRIKE！」

デイフォース「グガアアアアアアアア！」

デイフォースは変身解除された。

ケンタ「ぐ……は？」

突然ケンタはどこか別の空間に飛ばされた。

ケンタ「いつてえな〜。つて、ここつて……？」

そこにはオーズがいた。

そして、デイケイドも。

デイケイド「アポロガイスト！お前だけは絶対……！」

ケンタ「変身……！」

「カメンライド デイケイド」

デイケイド「うわあああ！」

デイケイドは、アポロガイストの攻撃を受け、ついにメダルと化してしまった。

デイフォース「ちつくしよおおお！もおお！訳がわかんねえ！」

オーズ「お前だけは、許さない！」

「クワガタ・カマキリ・バッタ ガタガタキリババガタキリバ」

そんな歌が流れ、オーズはガタキリバに変身した。

デイフォース「俺の無敵のコンボ……くらえ！」

俺はやけになりアタックライドカードを連続でスキャンした。

「アタックライド イリユージョン インビジブル クロックアッ

プ スラツシュ」

デイフォース「とりやあ！てりやあ！」

アポロガイスト「ズガアアアアアア！」

アポロガイストは苦しんでいるようだ。

アポロガイスト「覚えている……。」

そして、どこかの世界へ消えていった。

アंक「映司！やべえ！なんかすげえ大物のヤミーが！」

オーズ「なんだって！」

オーズが驚いた瞬間、背後からぞっとする寒気がした。

デイフォース「なんだあ？」

???????「グハハハハハハ……。オマエラライダーカ。

ヨワソウダナア……。」

オーズ「ヤミーって、これのことか？」

アंक「こいつが大物だ！」

オーズ「に、してはは小さいぞ……。」

小さい大物もいるのである。

モンハンでいう小さいイャンクックのことである。

その怪人はカブトムシのような角を持ち、ギザギザの爪をもち、何

でも噛み砕けるような歯を持っており、ドラスとブレイドと蜘蛛男を合わせたような姿だ。

???????「ワガハネオビートル。ネオグリードノダイーゴウデアル。キサマラライマカラマツサツスル！」

デIFOォース「とにかく！倒すぞ！」

ォーズ「ああ。」

ネオビートル「ブッタオスオス……。オマエラ、ムツコロス！ウヘヘヘヘ……。コレダイシュリヨウサマモオオヨロコビダ。」

ネオビートルは謎の奇声を発する。

デIFOォース「はあ！」

ォーズ「セイヤア！」

ネオビートルは青い血をブシュブシュ出す。

そして、ネオビートルは爆破した。

跡形もない。

ォーズ「やった……。ってうわああああ〜！」

デIFOォース「ぐわああ……。！」

突然、ぐらぐらと地割れが起こった。

俺たちは油断していたせいで、地面の亀裂の中に入り込んでしまった。

地底では無気味に笑うライダーの姿があった。

そのライダーは紅い眼でライダーを見つめていた。

???????「よく来たな……。わが名は仮面ライダーデイス

ティニー!!!」

デIFOォース「そんなことはどうでもいい！とにかく倒す！」

紅い目をしたそのライダー・デイスティニーは光線を放った。

ライダーたちはふき飛ばされてしまう。

デIFOオース「オーズ、コンボ使えるか？」

オーズ「アंक？いるか？」

アंक「まあ、このメダルを使い！」

オーズ「やるか……。」

「タカ・クジャク・コンドル タ〜ジャ〜ドォ〜ル〜！」

オーズはタジャドルコンボとなった。

アंक「一気に決める！」

オーズは専用武器・タジャスピナーにメダルをセットした。

「タカ・クジャク・コンドル・クワガタ・ウナギ・ゴリラ・チータ

ー！ ギガスキャン！」

最大7枚まで装填できるタジャスピナーに7枚のメダルを装填した。

オーズ「はあああああああああ！」

「ファイナルアタックライド クウガ・アギト・龍騎・555・ブ

レイド・響鬼・カブト・電王・キバ・ディケイド・W・オーズ・デ

IFOオース」

ギガスキャンの能力で大幅にパワーがアップしたオーズと必殺技の

チャージを発動したデIFOオースがディステイニーを一撃で倒した。

俺の戦いはここで終わった。

デIFOオース「オーズ！これからも、お前の世界を守れよ！」

オーズ「ああ、そっちこそ。」

二人は自分達の世界に帰っていった。

そんなころ、風都で。

翔太郎たちの知らないところで。

一人の青年がつぶやいた。

新たな時代がはじまるうとしていた。

ヒュウガ「スカイ・・・行くぜ？」

「翼」

真・メモリ大戦、開幕。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9924t/>

---

仮面ライダー大戦ガンバライド

2011年11月16日14時11分発行